

1976

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年四月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



四月號

(第七十四號)

天 下 獨 步 の 壯 觀

優 秀 映 畫 封 切 場

東 亞
直 營

中 央

館

(永 樂 町)

(電 話 本 局 一 〇 四 番)

四月號目次

(大體原稿到着順に依る)

彌田 治策 (李王職次官)	熊本城	(二)
時實 秋穂 (京畿道知事)	玄米と食氣	(四)
平井 熊三郎 (朝鮮勸業信託專務)	鮮人に副業を授けよ	(五)
瀬戸 槃 (瀬戸病院長)	開業十年	(六)
松田 學鷗 (總督府囑託)	聞見小録	(七)
衣笠 茂 (京城中央婦人病院長)	正宗と村正	(八)
山縣 佛三郎	紳士たるの道	(一〇)
中村 健太郎 (朝鮮佛教主幹)	玩掌小讀	(一一)
伊藤 憲郎 (京城覆審法院判事)	ボン失踪記	(一二)
石橋 滿 (朝明舎支配人)	九州權斷	(一三)
寺尾 猛三郎 (京城寺尾組)	土方の國と鑛夫の國	(一四)
倉田 敏助 (本町青々園主人)	茶人の樂	(一五)
田中 秀二郎 (明治町木村屋主人)	伊豆行	(一六)
青木 戒三 (總督府專賣局長)	壓迫感	(一七)
浦原 久四郎 (總督府遞信局長)	そろ盤	(一八)
中島 司 (殖産銀行調査役)	無外會頭	(一九)
駒田 亥久雄 (總督府地質調査所技師)	朝鮮の温泉	(二〇)
守屋 徳夫 (殖産銀行秘書役)	京城徒然草	(二二)
田中 守寛 (京城日報販賣部長)	宿屋哲學	(二三)
小野 久太郎 (朝鮮經濟日報社長)	小松侯爵	(二四)
加藤 松林 (鮮展東洋畫家)	朝鮮に來た畫家	(二五)
飯泉 幹太 (朝鮮銀行庶務局長)	僕の結婚披露會	(二六)
島原 鐵三 (第一銀行京城支店長)	胡沙笛の故事	(二七)
松寺 竹雄 (總督府法務局長)	繪畫『櫻』	(二八)
岸 巖 (朝鮮銀行整理部主任)	晝と夜	(二九)
加藤 賢 (京城府衛生課長)	虛榮と贅澤	(三〇)
高橋 章之助 (教育普及株式會社社長)	名人論	(三一)
平井 三男 (總督府學務課長)	孫氏の形見	(三二)
三戸 萬象 (鮮展東洋畫家)	失題	(三四)
古城 梅溪 (實業家)	詩學古事抄錄	(三五)
野崎 眞三 (朝鮮新聞社會部部長)	此頃の事	(三六)
堀内 滿輔 (ちよぶや主人)	贖物を掴むの記	(三七)
菊池 長風 (大陸通信社長)	京元線懷古	(三八)
淺井 佐二郎 (漢城銀行常務)	財界の曙光	(三九)
伊藤 龍 (朝鮮ホテル)	佛蘭西料理	(四〇)
田村 直一 (朝鮮警察新聞編輯長)	制札靈驗記	(四一)
寺田 壽夫 (京城日報社會部部長)	素人映畫觀	(四二)
鉅鹿 曉太郎 (滿鐵營業課)	お君のこと	(四三)

天 下 獨 步 の 壯 觀

優 秀 映 畫 封 切 場

東 亞
直 營

中 央

館

(永 樂 町)

(電 話 本 局 三 〇 一 四 番)

四月號目次

(大體原稿到着順に依る)

篠田 治策 (李王職次官).....	熊本城.....	(二)
時實 秋穂 (京畿道知事).....	玄米と食氣.....	(四)
平井 熊三郎 (朝鮮勸業信託專務).....	鮮人に副業を授けよ.....	(五)
瀬戸 槃 (瀬戸病院長).....	開業十年.....	(六)
松田 學鷗 (總督府囑託).....	聞見小録.....	(七)
衣笠 茂 (京城中央婦人病院長).....	正宗と村正.....	(八)
山縣 佛三郎.....	紳士たるの道.....	(一〇)
中村 健太郎 (朝鮮佛教主幹).....	阮寧小讀.....	(一一)
伊藤 憲郎 (京城覆審法院判事).....	ボン失踪記.....	(一二)
石橋 滿 (朝明舎支配人).....	九州横斷.....	(一三)
寺尾 猛三郎 (京城寺尾組).....	土方の國と鑛夫の國.....	(一四)
倉田 敏助 (本町青々園主人).....	茶人の樂.....	(一五)
田中 秀二郎 (明治町木村屋主人).....	伊豆行.....	(一六)
青木 戒三 (總督府專賣局長).....	壓迫感.....	(一七)
浦原 久四郎 (總督府遞信局長).....	そろ蟻.....	(一八)
中島 司 (殖産銀行調査役).....	無外會頭.....	(一九)
駒田 亥久雄 (總督府地質調査所技師).....	朝鮮の温泉.....	(二〇)
守屋 徳夫 (殖産銀行秘書役).....	京城徒然草.....	(二二)
田中 守寛 (京城日報販賣部長).....	宿屋哲學.....	(二三)
小野 久太郎 (朝鮮經濟日報社長).....	小松侯爵.....	(二四)
加藤 松林 (鮮展東洋畫家).....	朝鮮に來た畫家.....	(二五)
飯泉 幹太 (朝鮮銀行庶務局長).....	僕の結婚披露會.....	(二六)
島原 鐵三 (第一銀行京城支店長).....	胡沙笛の故事.....	(二七)
松寺 竹雄 (總督府法務局長).....	繪畫『櫻』.....	(二八)
岸 巖 (朝鮮銀行整理部主任).....	晝と夜.....	(二九)
加藤 賢 (京城府衛生課長).....	虛榮と贅澤.....	(三〇)
高橋 章之助 (教育普及株式會社社長).....	名人論.....	(三一)
平井 三男 (總督府學務課長).....	孫氏の形見.....	(三二)
三戸 萬象 (鮮展東洋畫家).....	失題.....	(三四)
古城 梅溪 (實業家).....	詩學古事抄錄.....	(三五)
野崎 眞三 (朝鮮新聞社會部長).....	此頃の事.....	(三六)
堀内 滿輔 (ちよぶや主人).....	贖物を掴むの記.....	(三七)
菊池 長風 (大陸通信社長).....	京元線懷古.....	(三八)
淺井 佐二郎 (漢城銀行常務).....	財界の曙光.....	(三九)
伊藤 龍 (朝鮮ホテル).....	佛蘭西料理.....	(四〇)
田村 直一 (朝鮮警察新聞編輯長).....	制札靈驗記.....	(四一)
寺田 壽夫 (京城日報社會部長).....	素人映畫觀.....	(四二)
鉦鹿 曉太郎 (滿鐵營業課).....	お君のこと.....	(四三)

熊 本 城

法學博士 篠 田 治 策

其 三

熊本城趾に登りて、尙ほ一つの見逃す可からざるものがある。明治九年十月、神風連として知られたる、彼の敬神黨の壯士が、白刃を振つて砲兵歩兵の陣營に研り込み、縦横奮撃したる遺跡のそれである。近頃師團司令部にて、各所に標柱を樹て其事蹟の大要を記して之を表示せるが故に、遊覽の客をしてぞろに當時を追憶せしめ、彼等が活躍したる状況を眼前に彷彿せしむるのである。

新式武器を有する砲兵歩兵に向つて、拔刀にて研り込むが如きは、如何に彼等が武道に長したりとするも固より無謀の擧たるに相違ない。然るに之を敢したる彼等の心事に至つては、亦之を諒とすべきものがある。彼等は極端なる敬神家であつた。而して又赤誠を君國に捧ぐる忠君愛國の志

士であつた。滔々として侵潤し來る西洋の文物制度を視て、我國體を傷け神州の天地を汚すものなるが如くに考へた。野口知雄一派の如きは、洋風を嫌厭すること殊に甚だしく、一切の洋品に手を觸れず、電信線下を通行する毎に、屢子を其頭上に懸したと謂はれて居る。又新に發行せられたる紙幣の如きも、歐風に摸倣したるものとして、之を手に觸るるを辱とせず、富永守國等の如きは、賞典録を賣却したる代金を縣廳より受取る際、兄弟三人協議の末、其紙幣を箸に挿みて持ち歸つたと云ふことである。斯かる頑固なる保守的思想を有する彼等は、世事日に非なるを見て、慷慨悲憤自ら禁ずる能はざるものがあつた。明治四年斷髮令出で同九年に廢刀令出づるに及んで、加屋霽堅の如きは、大に其不可を論じ、建白書を上りしも省みられず、憤然

として錦山神社の祠官の職を辭した。是に於て同志の者相謀り、今は一刻も猶豫すべきの秋に非ずとして、斷然兵を擧げて政府の施設に反抗せんとし、先づ鎮臺司令官、熊本縣令等を誅し熊本城を奪つて天下に號令せんとしたのであつた。而して彼等が一たび事を擧ぐれば、海内不平の徒は翕然として所在に蹶起し、歐米摸倣の政府を覆へし、以て我國體を維持し得るものと信じたのである。

明治九年十月二十四日、薩南負嶼の猛虎は未だ其の爪牙を露はさざるに先づ、同志百八十四名、太田黒伴雄、加屋霽堅を首領として事を擧げた。夜半十一時半愛敬正元の家を發し、一隊は鎮臺司令官種田少將の邸を襲ふて之を斬り、一隊は聯隊長、一隊は參謀長、一隊は熊本權令の宅を襲ひ、主力隊は砲兵營を襲ふて之を陥れ、轉じて歩兵第十三聯隊西門より突入し、奮闘數刻、鎮臺兵を死傷せしむること三百十四名、一たび軍旗を奪ひしも、衆寡敵せず、太田黒伴雄、加屋霽堅等の首領相次で死傷し、全軍大敗遂に潰散の止むなきに至つたのである。

敬神黨の士には、其の人爲り、純忠至誠にして敬神勤王の念最も篤く、學は和漢を兼ね、亦能く武道に長じたる者が多かつた。彼等が遺したる辞世其他の詩歌に徴するも、辭藻豊富、品格高尚にして其蘊蓄の深きを知るに足るのが多々ある。輕事を過りたるの誇りは免れざるも、心事高潔にして光風燭月の如く、其最後は如きも武士の面目確たるものがある。黨員中には或は年少にして會津日虎隊の夫れに比すべき者もあつた。即ち小篠一三は兄弟四人、富永守國は向三人、愛敬正元、鶴田太直等は父子共に此役に殉じ、年少者には十六歳の者一人、十七歳の者四人、十八歳の者四人、十九歳の者三ハを數へた。華々しく戦死を遂げたる者は謂はずもがな、創を負ふて一たび家に歸りし者も多きは従容として屠戮した。阿部景壽の妻は其夫が同志と共に自刃するや傍にありて直ちに夫の刀を執つて節に殉じた。太田三郎彦の如きは年十七にして此舉に加はり、聯隊長の宅を襲ふて聯隊旗を奪ひ、更に歩兵營に轉戦して、臺兵八九名を斬り、後に家に歸りて其姉

に後事を托し、親友の少年二人を招き訣別の宴を張り托するに清志を繼ぐ可きを以して、書齋に入り従容として自刃した。猿渡唯夫も亦十七、歩兵營の襲撃に加はりて敵十數名を殲し、金峯山に退きて再舉を謀りしも、事の成らざるを知り、家に歸りて父母兄弟に訣別の恠を擧げ、終りて獨り書齋に入り屠戮した。其他之に類するもの多く、壯烈鬼神を泣しむるものがある、宜なるかな、昨年二月紀元節の日、太田黒、加屋の兩首領に對して長くも贈位の御沙汰があつた。聖恩枯骨に及び、地下の英靈亦爲めに感泣するならん。

此等の保守思想と熊本城とは何等かの因縁あるやうにも思はれた。

天下の名城と誇る熊本城は、清正公の築きたるものである。武士の型典たる清正公は異國までも其爵名を轟かした。宗教に歸依して信仰に生きた人である。慈仁を以て民に望み、産業を起して福利を増進した、故に今に至るまで、本妙寺に太鼓の音の絶へざるが如く清正公は熊本人士の崇敬の的となつて居るは謂ふまでも無い。熊本人士が伏して此偉人を懐ひ、日夕仰いて由緒ある古城を望む時、誰が油然として懐古の情を起さざるものあらんやである。淵淵常ならぬ白川の流れは既に淺くして、復た昔日の舟筏を通ずるに由なきも、獨り熊本城は古色蒼然として高く中天に聳へ、老樹鬱蒼として其間に蟠り雄大豪壯の氣、依然として舊態を改めざるのである。則ち勤王保守の觀念が三百年來自然に此間に涵養せられ、南朝志士の遺風と、細川氏が累代士を養ひ、朱子學を奨勵したる結果と化合して、此氣風を醗酵したるに非らざるかとも考へて見た。

玄米と食氣

京畿道廳 時 實 秋 穗

【 四 】

今年も早三月が近くなつた、各學校共卒業期で、所謂有爲の卒業生が澤山出る時期になつた、卒業式の行事としては、必ず相當の告辭や祝辭が表はれる、斯様な場合何れを見ても立派なものばかりであるが、私の経験する所では案外其の效能は少い、只何某が祝辭を讀んだとか、祝辭の數が幾らあつたとか云ふことが、新聞に掲載せられる位で、當の卒業生には殆ど何等の印象をも與へずに終るのが普通である、それに就て私は、或先輩が、祝辭など讀むのは意味がない、何でもよいから、感じたことを簡單でも話すがよいと云はれたのを覚えて居る、私も多年の経験からさう思ふて居る。

私が小學校を卒業したときのことである、卒業式は例の通り進むが、來賓の一人、當時縣會議員で今では代議士になつて居る人が演壇に現はれて、其の日の祝辭として、本日は誠に愛でたい、皆さんは今本校を卒業して行かれるのである、中には進むで中等學校に入られる人もあり、又郷里にあつて家業に従はれる人もあり、其の他向はれる方面は色々あるであらうが、之は皆さんの撰擇次第で、結局皆さんの今の境遇は、丁度玄米の様なものである、餅になる人もあらう、御飯になる人もあらう、菓子になる人もあれば、酒に造り

れる人もあらう、何れにしても前途は多望である、よい餅、よい御飯、よい菓子、よい酒になつて貰ひたいと云ふ意味のことを述べた其の日色々の祝辭や送別の辭などあつた、今日では全く記憶から失はれて居つて、其の日の記憶としては、只之れだけが残つて居る、面白いと思ふて、先年或任地で、中學校の記念日に此の話をしたことがある、生徒は皆喜ぶて笑ふた二三日經つて中學生の一隊に出會ふと『あゝ玄米部長』（當時内務部長であつた）がと云ふ、聊か苦笑せざるを得なむだ、あの話を覚えて居るかと思ふと愉快であり、人前でさう云ふ所が矢張り彼も玄米だと思ふた、同時に自分も役人と相場が決つてかなり古いが、まだそれでも玄米だぞと一種の希望に燃えた、人間は兎角固定せぬ所に面白味がある、玄米と云ふ言葉は、私の記念すべき日に聞いた話丈に今に忘れられぬ。

中學校を卒業したのは、二十歳にも達したときのことである、然し其のときに、宗文句の告辭や祝辭が何うであつたかは全く覚えて居らぬ、兵式の濟むだ後の謝恩會の席上で、某教諭の話された話は今以て忘れぬ、之は時々人にも話して昔を偲ぶ料にして居る、それは人間の一生を大別して三つとする、第一期は食氣の時代、第二期

は色氣の時代で、第三期は銷氣の時代であると云ふのである、説明は省いてもよからう、之も面白いと思ふ、少年時代から青年時代に懸けては、勿論食氣の時代である菓子は何十錢買ふて來て、食競べを遣るのは其の時代のことである同時に精神的智識的にも此の時代は、何物かを取入れ様として心を碎く時期である、此の時代に食足らなむだ者は虚弱な身體の持主になる、頭腦の食方の足らなむだ者は後年馬鹿で終るのは疑のない事である、此の話をした先生の結論が、何うか皆さん、肉體的にも精神的にもよいものを澤山食ふて、立派になつて呉れと云ふことであつたのは云ふ迄もない、色氣に心を奪はれたり銷氣が出ては、先づ終と云ふのが世の常である、銷氣も全然捨てることは出来ない、銷氣も銷如何によつては結構に違ひないが、之等は餘程吟味を要する食氣丈は何人も不斷旺盛でなければならぬ、食氣の時代は少青年を象徴する時代である、之丈は忘れたくないものである、自分としては幸ひ色氣は着かず銷氣に縁がななく、まあ何時迄も食氣主義で進みたい、否進む外ないと思ふて居る

『玄米と食氣』云ひたいことは之丈である、何とか式に一言以て祝辭とすは至極簡單で、又時間の關係や、場合の如何や、其の他色々々の事情で一樣には云へぬが、何物かを會衆の心に殘さうと思ふ場合には相當考慮する必要があるであらう何れかと云へば、感興を惹く様な簡單な話をするのがよくはないかと思ふ、玄米と食氣との二つが、私として出来る丈捨てたくないものであるのは云ふ迄もない（二月十七日稿）。

にあらう、然かも之等の訓業を辭

鮮人副業を授けよ

朝鮮勸業信託 平井熊三郎

にあらず、然かも之等の副業は鮮人に取りての唯一副業で亦必ずや深き趣味を持つべきものであらう

内鮮を通じて緊張努力を要すべき秋であるのに我朝鮮の到る處に游民的の人物が多い様に見ゆるのは甚だ遺憾なことである、地方に於けることは姑らく措いて問はないとするも京城市内を日々右往左往して居る鮮民の有様を言へば可なりにも多数の人々が戴冠白衣で例の長い煙管を啣へながら悠々と通行し、如何にも氣樂そつな顔付態度であるけれど、其の氣樂そつに見ゆる人々の大半は所謂無爲にして化すと云つた様な無意識的の人達であらうと思はれる、即ち農時期以外何事もせずして次ぎの其れを待つて居る人々であると言ひ得るのだ、然かも次の農時期まで生活し得るだけの貯へがあつて悠々するのであるかと言へば其の貯へのある人が割合に少ないので大多数は游民に近い人々であるのだ、若し之れ等の人々に何か業を授けたなら其の努力によりて富を増殖するのであらう、畢竟するに傳統的の悪い習慣が農時期以外は絶對的に遊び暮すと云ふ結論に到達するのである、今や産業政策を掲げて鮮民族の緊張努力を期待する大切な時機に當り此目障りなる機な游民が漸次増加し行くのを、『總督府の當局者』は別に何とも思はないと言ふが如きは私共の常に疑問とする所である。

特殊殖民地の性質を帯びて居る朝鮮は官民の協力によりて其大を構成せねばならぬ、其れには外觀美の推移にのみ關心せずして内容の充實に重きを置く必要がある、果して内容の充實に重きを置く必要があるとなれば治者たる總督府の指導誘掖にのみ倚頼しないで民衆互に緊張し衆力一致的努力と奮勵とを要するのである、而して鮮人は由來耐久力を有して居る、若し夫れ努力奮勵と言ふ場合に臨めば必ず爲し得るのであるから滞れ手で粟を糶まんとするが如き人々のみでない、唯だ問題は多年の悪い習慣を打破する事と努力奮勵の動機を授へさせる一事であるが、之れも敢て難事であるまい、即ち悪い習慣を打破する側面に於て努力し奮勵する道を開いて遣れば宜いのだ、如上の游民的の人物に見ゆる人々に對しては何等かの副業を授け、其副業に興味を持たせ獎勵に努め親切に導き、彼等の資産を増殖せしめば未だ此趣味を知らざるもの翕然として副業に就き、競ふて努力奮勵を爲すことは容易であると思ふ、茲に至れば其副業とすべきものは何々を適當かと言ふことになるが他は措きて差當りての適當事業は養蠶も可ならん、牧場經營も又可ならん、養豚養鶏も細羊飼養も皆な盡く可ならざる

單に副業と言つても其之を獎勵實踐せしむるには諸般準備を要する總督府當局者首め各道知事が私共と同じ感を以て游民的多數鮮人に副業を授くべき『應急的の措置』——之を廣く言へば如何にして副業に就かしむべきか、亦如何にせば彼等の資産を増殖せしむべきかに就て萬遺憾なき方法と準備とを要するのであるから本問題は現下に當面せる急問題として特に考慮を煩はしたい、私は多數游民的鮮人の爲に之を囑望する。

十八會の記

吉田 莊一

小野經濟日報氏が主催となり、十八會といふを組織し、二月の二十四日その發會式をやつた▲これは近頃の人間は、どうも老成(早老)として不可ん、時々もとの十八に戻つた氣になつて、大に飲まう、食はう、若返らうといふのである▲その日、社内社外の豪傑大に會し、盛にメートルを揚げたとは、痛快く▲小唄阪の住人岡村介石君、すつかり京城の名物男となつて了つたが、このごろ或人が、同氏に寄せての歌に曰く『入の道のぼり下りの小唄阪西よ東としめす介石』▲鈴木本町署長、溫和快活で、頗る氣うけの宜い人だが、酒席の一つ囀は『高山彦九郎』——これは實にうまいものだとは、一度拜觀の榮に接したいものだ▲丸山前警務局長、斷然養酒……但し賞分の間……とは、ナル程その人らしくて面白。

開業十年

瀬戸病院長 瀬戸 潔

醫者になつて十五年目京城に來て滿十年恩給がついて整理になるべき者かも知れない、でも京城の開業醫の内では若い部類に屬するんだから發言權（少くも雜筆社に對して）はあるつもりで貧乏開業醫の非鳴を揚ぐるのを聞いて貰ふ生來貧乏して育つたので金のない時は使はない拂はないと決めてるので貧乏は左程苦しいとは思はずに過して來たが之が原因したのが變な理屈っぽい人間になつたので屢々誤解を招くのは閉口する先づ其一例を述べる。

ダイナマイトの怪我
某工事場でダイナマイトが爆發し其番小屋が飛んだ大怪我人が四人出來た其三人を僕の處に擔ぎ込んだ。やがて其内二人は危険な症狀が去つたが他の一人は益々重症になつたので暫日不眠不休で僕の全力を盡したが中々よくならない處で其工事請負者の代理と稱する者が來て三人共京城府の施療院に移したいと云ふので輕快した二人は勿論よからう一人の重症者の方は本人も行きたくないと云ふのだから經費の問題は施療院と同様にしよう將來萬一の事があつた時にも家族に對しても主人の方も辭が立つてはないかと云ふた處其使は無理でも何でも病人を連れ出さうと云ふ病人と其家族とが僕の處に

居残ると主張する。そこで僕は僕の考で主人の不利益になる様な事を主張する使者を主人の代理と認めないと云ふて追ひ歸したら其晩酒を呷つて其使者と云ふ奴が位階勳等のある者を辱かしたと云ふて暴れ込まれて閉口した。

下手な同情
をして却て迷惑する事は吾々の職業柄頗る夥しい嘗て小寒い十月末貧相な男が來て九月以來某病院にて治療して居りましたが近頃仕拂が出来なくなりましたから他の病院に行くと云ふて追拂れました何卒治療をして下さい勤ける様になつたら御仕拂を致しますとの事で十二月初め迄治療してやつたので全治した十二月の末になつて御禮の挨拶に來たが挨拶が濟んでも中々歸らない、やがて僕の手があった時改めて云ふには御存知の通り九月以來病氣をして居りましたので此歳末が苦しい御世話になりました序に五六十圓丈で宜しい何卒御拜借をと來たのには案外だつた、處が之を斷り云ふたら翌日から其代人だと云ふ不得要領の男が數日間毎日來て數時間宛腰をすえ

ての強要求の談判は恐入つた。

總ての醫者の泣言
の一つは故なくして診察を拒む能はざる義務だ、勿論大體に於て

離氏も尤の義務たるを認めるが官公立の病院付時として手續きを面倒にして置くため間接に其義務から逃れる仕懸けをして置くために其義務に對して有名無實の權利を伴ふ様なものは成るべく手をつけずにはすませ得る様になつてるのは社會政策上少し考ふべき事だ。

無産者の急病

とか怪我とか云ふ場合に一刻を争ふやうな時は殆んど凡てが開業醫の手に廻ると云ふ事實は誰でも御存じの事と思ふ、此際吾々醫者は其病人なり家族なりから報酬を取り得る權利を貰ふ、之は吾々の内では年から年中絶えたる事がないんだが殊に警察事故の怪我人の

山

松田 甲

年ごとに韓山杉の數まして緑のいろの空につける

救療は單に吾々丈に任せて置き官公立の病院は何とか云ふてなるべく取扱はないのは社會問題として考ふべき事だと思ふ。

獨者の自殺未遂、盜賊が怪我した時、無宿者の大喧嘩の末の大怪我など一度僕の宅に擔ぎ込まれてから官公立醫院に受取て貰ふ様に警察の手なり僕の方なりから交渉して十年間に一度も室なしと云ふ理由で受け取つて貰ふた覺えがない、時としては旅費と小使を呉れて歸りて貰ふ様病人に嘆願する事もある、一體此等は國家なり社會なりが負擔すべきものを吾々個人が法律上の強制の下に負擔するんだから社會なり國家なりからせめて何とか控位はあつて然るべきかと思ふ。

聞見小録

總督府囑託

松田學鷗

内地人が集ると『貴君は朝鮮に
來られてから何年になりますか』
『私はモ一何年になる』といふ様
に話合ふて互に移住の永きを誇る
のけ寔に結構な事で、それに又『
ドウモ内地に居る人達の朝鮮を知
らぬには困つたものだ』といふ言
葉も屢々聞くが、これも亦尤もな
事である。然らば朝鮮に永く住ん
で居る人は能く朝鮮の事を知つて
ゐるのであらうか。予は之に就て
甚だ遺憾に思ふ事がある。

例へば『朝鮮第一の高山の名は
』と一つ問題を出して見ると、大
抵は直ぐ白頭山と答へる。そこで
白頭山の絶頂(二千七百四十四米
)は國界碑の北の方一里程の處で
支那の内地に在る事を話すと、そ
れでは朝鮮第一と言はれぬと誰し
も肯つく。では何山でせうかと問
返すと殆んど答ふる人はない。實
際咸鏡北道鏡城郡朱乙温面と茂山
郡三社面の境に在る冠帽山(二千
五百四十一米)が朝鮮第一の高山
である事を知らぬ人が多いのであ
る。

そこで更に『朝鮮第一の長い河
の名は』と問ふ。誰れしも鴨綠江
と答へる。これは確にそれに相違
はない。然し長いと言つても何里
位あるであらうかと問ふと、其の
答へは、八十里、百三十里、百四
十里といふ様に區々別々驚くばか
りであつて、正當なる二百一里九

町なる事を知つて居る人は極めて
稀れである。だが地理學者として
有名な理學博士小川琢治氏の著
て師範學科中等地理學と題する文
部省檢定済の書にすら

鴨綠江は我が國第一の大河にし
て其の長さ二百料に及ぶ。
としてある位であるから己むを
得ないかも知れぬ、二百料を日本
里數に直すと僅に五十一里となる
日本第一の大河が五十一里では石
狩川。利根川。信濃川などを何ん
と言つてよいのであらうか。

朝鮮の山の高さや、川の長さは
臨時土地調査局で三角測量を基と
して正確に測定されたもので、之
れを動かす事は出来ないものである
序であるから書く事とするが、
文學博士井上哲次郎氏の『日本未
知學派之哲學』といふ書の藤原愷
窩傳中に

朝鮮の刑部員外郎姜沆、歸化し
て龍野にあり。
と書いてあるのを見た。姜沆は
號を睡隱と云つて有名な看羊録の
著者である。彼れは決して歸化し
た人ではない、又龍野に居たので
もない。言ふまでもなく文錄後よ
り續いた慶長年間、務安沖にて藤
堂高虎の部將に拿へられ、伊豫の
大洲へ引致の上、山城の伏見に拘
留せられた俘虜である。其の俘虜
中に置いたのが即ち看羊録で、そ
れでこそ彼れの名は顯はれて居る

のである。殊に彼れは俘虜であり
ながら、日本文教復興の祖とも稱
すべき藤原愷窩を補助したる日本
に取つては大なる功勞者である。
現に彼れの墓は全羅南道の靈光に
在り、遺稿には睡隱集といふのも
あり、又李太王十五年には大提學
さへ贈られた程で、歸化などと云
ふべき事實は更にないのである。

モ一一つは朝鮮の人から話され
て氣付いた事であるが、文學博士
幣原坦氏の『朝鮮教育論』の緒言
に、
『昨夜江湯春水生。蒙衝巨艦一
毛輕』方今文明の進潮は、李子
爵剛庵の所謂春水の如く漲つて
仙民を午睡より覺醒せしめ、曠
昔に無かつた幾多の事業を勃興
せしめた。

と書かれてある。李子爵剛庵の
所謂春水の如くと言はれたのを見
ても、此の昨夜云々の句を同子爵
の作と誤認せられた事が判る。こ
れは決して同子爵の作でない、有
名な宋の儒賢朱子即ち晦庵朱熹の
觀書有感と題する詩で後半は『向
來枉贊推移力。此日中流自在行』
と言つて昔から人口に膾炙してゐ
る者である。日本でもある事だが
朝鮮には殊に自作でない詩句を詩
いて誰の詩を録すとも何ともしな
い習慣がある。内地の人はよく朝
鮮の人の書を珍らしかつて揮毫を
して貰ふ様であるが、此等の事は
知つて居るのも必要と思ふ。

知らざるは知らずとせよ、知
らぬ事はこれより知るに力むれば
よい。但し有名な人殊に博士など
の著述といへば、誰しも知つて書
かれたものと信じて讀む。今や内
鮮人が相互に各々何づれもの事を
知りたいと思ふこの際、其著述に
誤りのなからん事を祈るのである

正宗と村正

中央婦人病院長

衣笠茂

○
 正宗は名聲の隆々たる他に其比を見ない、そこで古來此人を網世の名人と稱して幕府三百年間言ひ傳へ語り傳へた評判の結果今日も正宗と云へば絶對的名匠なりと思ふ人がある、然れども正宗必ずしも網對的の名人ではない、弟子の貞宗、左、兼氏等を格別等差のある程ではないと思はる、郷に比べたなら或は少々劣るかも知れぬ即ち本阿彌の鑑定秘訣の中にも『正宗の出來勝れたるを郷と見よ』と云ふ一節があるのでも其間の消息が分る。

○
 其證は天正以前は上位に列する事が出來ず第二流以下に居た、識者なくして發見されなかつたと云ふ人もあろうがさは云はれぬ、宇都宮三河入道以下斯道の目利家は澤山居た、これらの人が鶴と鷺とを間違ふべき謂れがない、また正宗と後年極めた刀で他の作に成つて居た刀がある、朝倉の籠手切は當時にては貞宗と云ふ事になつて居るが、加賀前田家にある時は行光、徳川へ來て本阿彌が正宗にした、加藤（左馬助）家の夫馬正宗は帝室の御物と成つてから信國と云ふ鑑定に成つて番外に墜された加州の正宗はもと大和の當麻である、ソレを光甫が研ぎ直して正宗に極めたと云ふ。

○
 絶代の名人、他作の追従を許さない程の正宗なら左様の事はある筈がない、當麻の刀でも正宗と同等の作があり、信國の作が正宗に化けて居る、行光とも見ゆる正宗があると云ふに至つては大名人には言はれまじ、況して水田の國重、國光、出羽大塚、關の氏房、康繼等を以て正宗として人の眼をくらます事が出来るに至つては推して知るべしではないか。

○
 然らば正宗はいかにして斯くの如く名聲が高きやと言ふに是には未だ究めの足らぬ事實があらうと思ふ、秀吉何か考へた事があつて正宗を賞揚したかも知れぬ、茲に一つ考ふべきは正宗、吉光、郷を秀吉の時天下の三作と極めて居ながら秀吉自身が正宗を差料にした話がない、秀吉の愛刀吉光、國行、左、行平、一文字、長光、兼光などは歴史上立派にあるが、正宗はまだ見當らぬ、諸大名に賜つた刀には随分澤山に正宗がある、大阪御物と云ふ押形の祭物は皆秀吉の差料であるが、正宗は極めて少い僅に一刀あるに過ぎない。

○
 いかなる大家名人でも完全の識量智能を具備する事は決してない大教育家必ずしも大學者とは定まらぬ、彼正宗も弟子を仕立てるのと鍛錬法の研究に於ては當時天下第一であらう、正宗が時代の要求を看破し、備前刀の曲る弱點を知

つて鎌倉一流の巾廣の丈夫造り實用上欠點のない處に著眼したのは一の發明である、随つて鈍と云ふものは正宗の最大長所と云つてよからう、即ち折れず曲らず尚且つ切れ味のよきものと云ふものを理想として、而かも之を具現に近からしめたと云ふても敢て過言であるまい、この研究の爲めには正宗は自身數回諸國を巡廻視察し、直接刀工に就て其流派の趨向を極め所在の刀を研究し攷々として倦まず彼の偉業を完成したのである、而かも性篤實にして信義友情深く門人を愛して之を獎勵したから世に十哲と稱せらるゝ如き大家巨匠其門下より輩出したのである、例へば左は筑前より遙々來て四年の間正宗の許に居て研究を積み、今や歸國と云ふ時師弟互に名残を惜み戀々の情に耐へず正宗小田原迄送りて別るゝに忍びず、箱根を越へて三島に至り、こゝで互に手を執つて泣いて別れたと云ふ、斯くの如く友愛の情が厚いから隨つて弟子の敬慕の念も深い筈だ、斯うして深切に世話したから其名も諸國に聞へて景慕する者が多かつたであらう、斯くの如く正宗は刀工の學術的研究家で鍛冶の大教育家と言ふ可きである。

○
 村正の刀は古來大業物と云ふ事になつて居る、其切味のよき事のみならず正に獨歩の概がある、其劍形に於ては豪壯の氣を具へ、京備前の上品な華奢な形と其趣を異にする、次に地鐵は青く澄みて肌立ち燒刃は雪の如く而も突元たる峻峯あるかと思はれ忽ち双先に飛び出さんとするまでに深き幽谷を現はし、一見人をして懐愴の氣を生ぜしむ、實にや古來村正は一度

鞘を改るれば血を流し耳が収ま

村正刀の龜甲の因を成したのであ

龜甲より鞘に収まりながらにして

鞘を放るれば血を見ねば再び収まらずと、斯ふ云へばいよく、村正は凄い刀だと云ふ概念を生ずるが、刀劍研究家の眼には決してそんな無氣味な刀ではない、實に氣のすがくする見ても氣持のよい刀である、元來村正が邪惡不吉刀として世に言傳へらるゝに至つた原因があるのである、即ち徳川家と村正の刀が一種不思議の惡縁があつたので、先づ家康の祖父清康が天文四年十二月五日尾州守山藩陣中阿部彌七郎に袈裟がけに一刀に斬られた其彌七郎の刀が村正、

其子の實忠が天文十四年三月家臣岩松八彌と云ふ者に股を刺された事があるが是れも村正、家康幼少の時駿河に在つて小刀にて手に疵を付た事があるが之も村正、それから關ヶ原で突かれて増先へ負傷したが此槍も村正、家康の長子岡崎三郎信康自刃の時天方山城守が介錯した刀も亦村正と云ふ次第で、重ねく村正が崇る様に成つた、ソコで落葉集には『家康公仰せられ候は村正の作の打物は當家へ對し不吉と被思召候間千子が作(村正の事)の打物類は悉く取捨てる様にと御納戸方役へ申渡さる』とある、其れ故幕府時代には三家譜代の大名旗本の土は陪臣までも村正を帶ぶる事を遠慮し、甚だしきは御祭制の刀也とまで言つたものである、併し外様大名では別段村正を忌み嫌ふ譯もなければ差料にした人も多いが、ソレも成るべく遠慮して作名を秘したり又は銘を擦潰したり、故りに銘の字を改作したりして差す様な次第で現に二代又は三代の村正で銘を直してあるものが幾何もある、是が徳川二百年の間に自然に一般的に不吉の刀の如く誤り傳へられ、

村正刀の冤罪の因を成したのである、實に可憐す可きである。

さて此村正と云ふ人は鍛冶の系統の不明の人である、俗間では正宗の門人と云ひ傳へて世人之を信ずるもの甚だ多いが、之は例の芝居に正宗の最高弟に村正と貞宗が其作刀より觀たる人格の比較に面白きコントラストがあり名前も丁度正宗の正と村正の正と偶然相通じ如何にも都合よき關係にあるからである、それで私は直接芝居を見た事はないが、古老の言傳へを幼少の頃聞いた事を記憶のまゝ、其概略を茲に記載する。

正宗或時夥多の弟子の中から最高弟たる村正と貞宗を呼び、此度汝等二人の中技勝負したる者の方に奥義を免許するから各々一刀短つ刀を打つて持參せよと申渡した兩人は各々齋戒沐浴して精神籠めたる一刀を打つて師匠の前に持出した、正宗は熟々と兩方の刀を覽たる後、邸前の小川に兩人を導き此兩刀を双先を上流の方に向けて川中に突立てた、そして川上から一本の藁を先づ村正の刀に流し掛けた、すると其藁が村正の刀の刃に觸るゝや忽ち川の滞りもなく物も見事にスカリと兩斷されて流れて去つた、次に又一本の藁を貞宗の刀に向けて流し掛けた、すると刃の一寸程手前の所に到ると不思議にも其藁はビタリと流れ止まつたかと思ふと双先を避けてスル／＼と側を流れて去つた、正宗即ち兩人を招きて『ヤヨ村正、汝は鍛錬の術に於ては誰にも劣らぬ腕があるが惜しい哉精神の修養が出来ぬ爲めに作刀に邪氣を含み、未だ寶刀を打つ事が出来ぬ、夫れ刀は切れる計りが名刀ではない、自然に

徳師はり鞘に収まりながらにして邪氣を拂ふ程の靈が無ければならぬものである、此點に於て貞宗の刀が優つて居る、それで此度は貞宗に奥義を許すにより村正は尙數年間修養を積めよ』と言ひ渡した、吉日を下して貞宗一人に對して其奥義たる湯加減、火加減の大傳法を授ける事になつた、所が性來短慮で負けず嫌ひの村正、何條以て納得我慢す可き『アラ残念やな我は貞宗の兄弟子であり腕前ヤワカ貞宗に劣る可きぞ、思へば恨めし

き師の依佐偏婆かな、イデ此上は其秘傳を吾れも盗み取らん』と企んで、傳授の場所に忍び入り今や正宗貞宗が互に面縛して(精神統一の爲め的方式)湯槽に手を差入れ一心不乱に湯加減を試めし居た所に、村正はと自分もソツと手を差入れた、正宗急ぎ湯の量の殖へたるに氣付き、忽ち手が一本増したるを感得し、脇差に手が掛かるや抜打に其手を切つて落した、村正驚き逃去つたが、奥義は獲る事が出来ず、終生一本の手で怨恨に満ちた心で刀を打つたから益々荒氣な刀が出来たと云ふのである

○ 村正は伊勢國千子村住、初代は法名を妙臺と稱し延貞貞治頃であるから正宗より五十六年後の人でなければならぬ、平安城長吉の門人も云ふと雖も、其作刀の風上り推斷したる説にして確證は無いのである、村正は四代或は六代ありと云ふ、今日は代下りの村正又は偽銘の村正多し、之は幕府を懼ると云ふ意味が自然消滅してから物數奇の連中に迎合する爲めで、却つて他の刀を村正に化けさせたものと見ゆるもの多々あるべしと思はるゝなり。

紳士たるの道 (上)

山縣 悌三郎

余は先頃二荒芳徳伯の『エチケツト』と題する小冊子を読みたるに、説く所簡明にして要を得、頗る有益の書であると思つた。これは、其の名の示せる如く、西洋の禮儀作法を抜萃したるもので、曩に我が少年團員が、日本國の少年團を代表して、丁抹に於ける國際會議に參列せらるゝに際して、伯より餞別として贈られたのである。伯は之に序して、『僕が初めて洋行して、英國に行つた時、海外駐劄財務官森賢吾氏が、僕に外國禮の心得として言はれた一語は、甚だ面白く、今も猶ほ深く心に銘して居る。それは『常に日本のサムライとしての嗜を忘れるな。英國紳士の道は、それ以上を出ない』と言はれたことだ。日本武士の身嗜は、即ち紳士の道である。萬一、日本の武士の道が、西洋の風習と違つて居たとて、何の耻づることはない。心の底には確信を有ち、さうして『郷に入つては郷に従へ』の考で行けば、恐らく大した失敗はあるまい』と述べて居られる。如何にも然うであらうと思ふ。伯は世の人の知るごとく、東宮職御用掛りであつて、丁度今より三年前、即ち大正十年に、皇太子殿下に供奉して、歐洲諸國を巡歴し、歸朝の後、澤田節藏氏と共に、有名なる『皇太子殿下御外遊記』を編輯した人である。皇太子

殿下の御渡歐に際しては、同じく東宮職御用掛なる海軍少將山本信次郎君が、廣く内外古今の行儀作法書を涉獵して、『紳士としての禮儀』を編纂せられたるが、其のうち、紳士の定義に關しては、次の如く述べて居られる。今同君の厚意に依り、茲に之を引用する。曰く、『吾人は常住坐臥、務めて紳士的な態度を取らなければならぬ。(紳士とは何ぞや)といふ質問を受けると、其の解答は頗る困難であるが、唯之を消極的に論ずると、大要左の如く答へられるであらう。

紳士とは強ち金持でもない、高位高官者でもない、美服を纏ふものでもない、勿論言を弄するものではない。其の内容が高尙優美で、外觀もどことなく亦能く整つて、何事につけても、絶えず他人に不快を感じしめないやうに努めるものである。要するに其の一舉一動は、探つて以て他の模範となすに足るといふやうでなければならぬ。再言すれば、
彼は禮節が正しい。
彼は眞摯である。
彼は何事にも突飛でない。何事にも極端でない。
彼は沈著である。彼の動作は優雅であつて、彼の辭令は、高尙であり、莊重である。
彼の言行は、常に公明正大である。彼は言行に快である。
彼は屈從的でない。
彼は食言することはない。
彼の説話は、卑猥でない、下品でない。
彼は自己に就いて語らない。
彼は冗古でない。
彼は必要以外に自己の爲めに強辯せぬ。
彼は如何に言ふべきか、又何時言ふべきかを知つて居る。
彼は他の言行を視るに、常に善意を以てする。
彼は他の主義主張を尊重する。
彼は他の意見を容るゝに吝でない。彼は利己主義でない。

◆ 雲

工藤 武城

名残なく風にまかせてゆきかしの雲の姿のおのづからなる
彼は行を改むるに憚らない。
彼は怨を忘るゝに速である。
彼は上長を敬し、下を慈む。
彼は上下に對して、一樣に懇切である。下級者を酷使するのは成り上り者である。
彼は上に諂はず、又下を侮らない。
彼は傲らず、謙遜である。
彼は下級者に寛であるが、それさへも狎れしめるやうなことはない。
彼は恩を知り、功を認める。
彼は邊幅を飾りぬ。
彼は服裝を清潔にして能く整へる。
彼の好みは高尙で、派手でなく濫い。
何人も富豪たる能はず、然も如何なる下級者も悉く紳士たり得る。

阮堂小牘

朝鮮佛教社 中村健太郎

私は、曾て雑筆書樓主人から、『お前の好きな朝鮮の墨蹟』といふ間に對して、畫の一番好きなのは豹庵で、書が一番好きなのは、阮堂だと答へて置いた。

實際私は阮堂の書が大好きである。それで阮堂の書と云へば、戀人にでも逢つたやうな気がする。若しも誰かが、阮堂の書があるなどと話して呉れるものがあると、知ると知らざるとの別なく、見せて貰いたい。それで少し閑がある時、遠慮なしに出掛けて往つては見て貰つてゐる。

私の是まで見せて貰つた、阮堂の書の内、一番上出来だと思つたのは、子爵関内庵氏所藏の六枚屏風である。頗る大きな字を、随分大膽に書いたのであるが、筆力雄健、墨痕淋漓、眞に龍虎の躍るかと思はるゝ、入神の墨蹟である。子爵尹德榮さんの處にも、立派なものがある。畫家の金圭鍾さんも二三藏してゐる。

内地人間に、阮堂の流行したのは、七八年前であつた。私の好きになつたのも、其頃からである。鐘路一丁目に居る洋服屋の濱吉太郎さんなども、阮堂自慢の方で、一寸珍らしい屏風を持つてゐる。

前田元憲兵司令官の藏幅の内にも中々面白いものがある。米倉町の和田常市さんも、亦阮堂自慢の一人だが、此處にも一寸面白いものがある。阮堂の書を、最も多く集めたのは、何と云つても林田虎雄さんであつた。阿部無佛居士も、一寸變つた面白い物を藏してゐる

私も、數年前、七言絶句を横に書いたものを手に入れて、愛玩してゐたが、是れは或人から懇望されたので譲つてしまつた。其後私は古本屋などにも頼んで餘程氣を付けてゐるが、近來は、全く影を潜めてしまつた。處が、最近不圖阮堂小牘といふものを發見した。是れは、阮堂が、當時其の親友との間に往復した數十通の書簡を集めたものである。

阮堂は、其の父君の觀察使に隨いて、平壤に往つた時から平南の書家曹訥人に就いて、書を學んだ訥人は、阮堂が京城に還つた後は阮堂のために、手本を書いて送つたり、阮堂から送つて來る清書を添削したりして、訥人は、非常に阮堂を愛して、阮堂の書道の爲めに貢獻した。隨つて阮堂の訥人を敬慕することも、一通りではなかつた。

私の今度發見した、阮堂小牘の

内に、左の一書がある。

近日令曹訥人作畫、恨不汝之在旁同證也。汝雖不在而亦爲汝作幾紙佳扇、字勢雄奇甚可觀、必於日間出來取去可也。

と、是れは、阮堂が、訥人を京城に招待して、翰墨の會を催した時のことではないかと思はるゝ。其席上の光景を、眼のあたり顯るやうな感がある。

若し夫れ斯道の同好者によつて阮堂の墨蹟展覽會でも開かるゝ場合には、一報して戴きたい。私も此の阮堂小牘を末端に出陳して、大方の鑑定を仰ぎたい。(大正十四、三、四)

世間ばなし

平田久雄

殖銀の中村さん『決戦記』の一文に依つて、すつかり美少年の金看板がついて了つた▲處で、中村氏の告白によると、イヤあれは、當らざるも甚しい、若し美少年といへば、わが行の三葉氏であらう、第一モテルことが、何よりの證據だと▲實際三葉氏は、あのつれづれ草の情調で、何處へ行つても、モーさん／＼で、四方八方から營め廻されて居るらしい、どうも怪しからぬ▲三戸萬象君が、原稿を書くといふので、一記者がそれを貰ひに行くと、玄關に出て來たオモニ先生『あゝ先生ですか、四五日前、酒を飲んで出た切り何處へ行つたか、ウリにも解りません、タンダに困るよ』▲先生例に依つて、盛に泳ぎ廻つて居るらしい▲尤もユゝが先生の面白い處で、先生の先生たる所いかも知れぬ、遣る可しく。

ボン失踪記

京城覆審法院 伊藤憲郎

一一一

ンはぬないと云ふ、私の出たあと一度家に歸つてゐたが急ぐ人に連れられて行くのを一番上の子が見たと云ふのである、それから家内中が大騒ぎをして近所を見廻つたが見えない、盗られたのでせうかと目に涙さえ溜めて答へた。

×

それから二三日風の音にも我れはボンが歸つて来たのでないかと雨戸を明けたりしたことであるが遂に姿を見せぬ、近所で犬がしきりに盗られる、E氏のジョンF氏のマル、殊に立派な逸物であつたが、鮮人に食はれたらうとのことである。お宅のボンも矢張りうでせうと云はれた。

×

或る新聞社の人々が三百圓出して犬を買つた、幸ひ犯人は捕まつた然しそのときは皮になつてゐたそうである、訴へたが微罪不起訴になつた。犬を食ふ此の國の人々の習癖を私は憎む、犬盗の被害利益は物質的に止まらない、寧ろ、愛情の裏奪である、償ひ難き精神的苦痛である。

森林の産物に對して森林令と云ふ特別法のある如く人間に最も忠實なる犬のために愛犬保護に關する特別の法律が欲しい、即ち刑法の窃盜罪には懲役刑しかないものだから稍もすれば輕き罪は不起訴になる、森林の産物に對して懲役刑の外に罰金等の輕い刑が規定してあつて可成汎く一般的に罰し得るやうに愛犬保護法とでも云ふ簡便な法律を造らへて犬盗をドンドン罰し、我れ／＼の犬を保護したい、殊に朝鮮に於て此の必要があると思はれる、愛犬家の輿論を喚起したい。徒らに大正の犬公方のみ笑はるゝ勿れである。

ボンと云ふのは私の家の犬の名である、其のボンが一週間前に突然私の家から姿を消した。

×

去年の秋もう寒い風が吹き初めやうと云ふ頃或る日の夜中、北側の櫓側の下で物音がした。私等は皆、目をさました、其の音は中々止まない、バリ／＼と木や土を撞く音である、猫かと思つたがそれにしては音が高い、何處かの犬であらうと云ふことになつたがそれならなぜ無暗矢鱈に其處りを撞くのか皆目見當が付かなかつた。然しもの二十分ばかりしてそれは止んだ、寒い晩なので私等は又其儘寢て終つた。

×

起きて見ると果して犬である、而かもセッター種の立派な雌である、櫓の下に暫く顔を突込んでゐたオモニが犬が仔を生んでゐると叫んだ、後についてゐた子供等が早速又私のところへ報告に來た、親犬のあない留守に仔犬を數へると可愛い奴が八疋迄ゐた。近邊にオモニをやつて持主を探ねさせる、二三日經つて裏山の上に住んでゐる巴樂萬氏の所有であることが判つた、八疋の仔犬は籠を持つて迎へに來た其家の雇人に運ばれてゐた。一月して黒い未だ足のヨチ／＼する雄の小犬が巴樂萬氏が

ら私の家に來た、其頃恰度私は藤天留氏に佛蘭西語を習ひ初めてゐたので妻は笑ひ乍ら佛蘭西語で名前をお付けなさいと云ふ、勿論未だに少しも進んでゐないが其頃ではなほさらの事である、ノワ(黒)もシアン(犬)も可笑しい、ボン(善い)がよからうと云ふ／＼そんなことでボン／＼と毎日呼ばれることになつた、支那人が來てケエ、チビ(犬の家)を造らした犬泥棒がしきりに流行する頃である、晝の間人にとられぬやうに鎖を付けて柱に結んで置いた、ボンは牛乳の残りや糞籠の御馳走にあづかつてドン／＼大きくなつた。

×

居なくなつた日、私は木曜日なので例の通り清涼里の學校へ行くため家を出て電車の停留場の方へ歩いて行くと、飛んでもない人の門口の溜箱の處にボンがゐた、未だ鎖に結ばれなかつたのでひとり遠征を企てたのであらうが一人の鮮童かゝりしきりにあやしてゐた私は道を急いでゐたが彼を家の附近迄連れ戻つた、學校へ行く日になければ鎖につなぐ暇位はあつたのであるが心ならずそのまゝ清涼里へ行つた。學校から役所へ廻つて四時退廳の鐘を聽いて、直ぐ歸宅した私は朝の事が氣掛りで犬小屋をのぞくとゐない、と同時に臺所から家内の聲がした。果してボ

九州横断

朝明社支配人 石橋 満

もう十五年も前の話です。時は盛夏。十四と十六と十八の何と言つても生意氣盛り。

久留米熊本間は汽車。それからが大變です。九州横断の徒歩旅行と出懸ける。

まだ寝て居る熊本の街を有名な毒酒屋の黒舞を左に廻つて登る。山は阿蘇山。立野で晝食。ヘトヘトになつて饅飴屋にトリ込むと、

つい好い氣になつて眠てしまふ。ドシャ降りの夕立だ。池の緋鯉がはねまわるので目が覺めた。差當り『二百十日』の圭さんと鏡さんなら雨を眺めて議論になる處だが小倉服は麥藁帽子に雨を受けて山路を登る。冷々として氣持が良い。其日は湯の谷に泊る。

雨に洗れた緑の中に栃木の街の瓦が點々と見え、夕飯の煙が昇る夕暗は水氣と共に山を包む。

二枚のシャツと小倉の上衣を頭に向けて乾しながら噴火口に向ふ一面の茅、其中をワネリ／＼と二尺巾の道を通る。頭の上で夏の日がキラ／＼と光る。玉の汗が流れる。然し足を止めると冷たい風が一度に汗を拭ふ。汗を拭ふて天に消える。女の強力が一寸挨拶して追越して行く。

噴火口に寶鏡箱がある。冥土の旅に金は入らぬ道理である。モク

モクと白い煙を吐いてお山は静た少し下に一軒茶店がある。石細工の土産物が並べてある。裏に廻つて廻の水で顔を洗ひ手を洗ひ脛もまくつてドーとかける、水の冷たさ——店の爺が飛んで来てもつた

いない事だ、よしてくれと云ふ。聞いて見ると麓から毎朝馬の背に積んでくるとか。日暮に宮地に著く。阿蘇神社がある。今は此處まで鐵道があり第一の登山口とか。

暗く成つてから竹田に著いた。提灯をつけて魚住の瀧を見に行く。

◆浮世繪の會

雜筆 記者

◎湯村さんを講師にして、一日浮世繪のお話を、うかがふことが出来たのは、近來のうれしいことであつた。

◎有賀殖銀頭取に主催者になつて貰つて、同じ銀行の方十名ばかりそれに安東さん、住井さん、瀬戸さんなどの顔も見へた。

◎主人公の所蔵品は元より、御持参物も多いので、三四百點になる湯村さん一々解説し、説明し、批評する、大に心に會する所がある。◎頭取のものにも及第物が多かつた。但し一枚二千圓もするといふ宮樂が『これは落第です』と來た

月が出て白絹が五つ懸る。静かな龍だ。廣瀬中佐の屋敷と墓を見たかと思ふ。此町は出口も入口もトンネルである。

朝の街は靜である。街外れに生の大木がはすに裂いて道に横はる落雷の跡らしく空模様か氣になる道を迷つて沈墮の瀧に出た時は晝に近かつた。發骨所に助を乞ふて晝食にありつく。川が其儘切落されて瀧をなし流れて淵となる。片側はアンチモニンの様な切立てられた岩である。實に雄大な景色だがほんやりしていると日がくれる。大分に着いた時はホツとした。

縣廳前の堀端の道を豫定の如く別府まで延ばす事にした。幾度か道は曲つて目の前に月に照された海を見た。海一幾日痛む足々曳きずりながら東の海をあてに歩いた事でせう。三人は思はず道側に打臥した。遠くで一番鶏がないて居る。

には、我輩『ウーン』と、おぼへず唸つた。

◎『これが完全に保存してあるなら一萬兩』——といはれ深尾さんお國の倉の鼠をチエーツと叱吠したのも痛快。

◎晚餐を頂いてから、關雪の色紙や、千代の短冊が出る。就中馬琴の原稿と、一九の草稿とは稀代の珍品——これだけは誰れもアツと嗔服する。そのあとで、頭取多年心がけたといふ『マガ玉』が出るさすがに多數蒐集されて居るのに今更ら一驚を吃する——これを學術的に解説するものがあつたら、それこそ一代の聽物であらう。われ／＼は、その美しいだけでも、ふかく心を引かれた。

土方の國

—と鑛夫の國—

京城寺尾組 寺尾猛三郎

段々變つたが、昔の鑛夫と土方には面白い話がある。更らに兩者を比較して見ると、其處に津々々として興味が湧く。一口に評すれば鑛夫は極端な個人主義で、其團體は共和國の縮圖でありながら官界紛々、土方は親方主義……で其團體は君主專制の寫眞でありながら平民的だ。住んで居る小屋を土方は『部屋』と云ひ、鑛夫は『飯場』と云ふ。帳付けの執務する所或は物品を渡す所を土方は『帳場』と呼び、鑛夫は『官場』と呼ぶ。『官場』と云ふのは生野銀山其他の幕府又は諸侯の經營せる鑛山に役人が詰めて居つた所から出た名稱だらうと思ふ。鑛夫は例の如く神祖權現様が生命辛々逃げ込んで來たのを庇つた功に因り、信州日蔭澤に於て有名なる山法五十三箇條の掟書を拜領して以來野武士を以て自ら任じ、職を失へば『浪人』したと云ふ。他の鑛山に行くと先づ『自分浪人ものに御座んす』と名乗る『サアお上り下さい』と言はれ、草鞋を脱ぎ、衣類を着更へて、サア挨拶となる、頗る眞面目腐つたものだ。『時候と申しましては追々凌ぎ好く相成りまして君様の御身に取りましても始終御壯健にお暮らし成されましたとお目出たう存じます』と一つ叮嚀に頭

を下げると云つた調子だ。就職すると『住口』になつたと一同に報告せられる。飯場頭はあるが友子の勢力旺盛にして此大統領殆んど威望は無い。友子の内の年長者所謂伯父さん株が元老然として牛耳る。何か不満があると機文が各飯場に飛ぶ。山中友子の寄合ひとなり、造作も無く休抗となる、整然として一絲亂れず、同盟罷工は強ち毛唐の新發明でもなければ大正労働者の專賣でも無い。三百年の昔からズット繰り返して居る。土方は黒獄と稱し、關東方面特に上州地方で威張つたものだ。土方は乾兒の杯を貰ふと、先づ『仁儀』の稽古をする。『仁儀』は辭儀のことだらう。一通り『仁儀』が出来ると何處でも飛んで歩く。之れを『西行』に出たと云ふ。一は浪人、一は西行、面白いと思ふ『仁儀』に魔胡突くと取つ縮められる。其『仁儀』たるや無邪氣で滑稽だが六かしい。仁儀は如何なる場合でも土足だ、例へば一旦上つて居つても友達が丁場から歸つて來ると、土間に飛び下りて『仁儀』を述べる。其格恰が又噴出しなくなる、丸で軍鶏の蹴合だ。中腰になつて兩々相對し、各左手を片膝に突つ張り、右手は握り拳を拵えて地に付ける。始めに入口で

『親分さんのお宅はこちらに御座んすか』と云ふ『サア客人お這入りなさい』と應へる。這入つて例の腰付で『御免なさんしお控へなさつてお呉んなさんし』と云ふと『コレは客人お控へなさつてお呉んなさんし』『どう仕りまして自分旅先きに御座んすお控へなさつてお呉んなさんし』『旅は同族に御座んすお控へなさつてお呉んなさんし』『旅は同族先客さんとお見受けますお控へなさつてお呉んなさんし』。これから彌よ『仁儀』になる、口の達者な連中は口舌が大變だ。其頃安場大作と云ふ親分の娘お岩さんが戀男の新ちゃんと一所に『西行』したが、新ちゃんまだ甞出して『仁儀』が縁に出來ないのを、お岩さんが代つて挨拶する。今も昔も女の徳だ、譯も無く難關を突破する。土方仲間に流行つた唄の通り、『安場大作のお岩ちゃんの新ちゃん甞出した、皆さん頼みますオホ、』で片付けて了ふ。土方の親分は非常な權威を以て居る、專制國の君主だ。従つて土方は規律が峻厳で、我儘を容さない。喧嘩をするにも鑛夫は自己の利害を争ふ場合が多く、個人的に強い悍猛凶惡なる人物が輩出した。其頃足尾銅山を根據として青木春、世良長、兒島増、菊地米など賣出したものだ。土方の争は親分の爲めとか或は稼業柄の原因が多い。そして團結力が強く親方にも傑出した人物が群起した。今村淺吉、川口要三、三谷周吉など代表的成功者だ。鐵道工事特に隧道工事が始まつてから九州を本場として隧道坑夫が新に産れ出たが硬岩を鑿るには本職だから鑛夫が澤山就職したが、此共和国國民も土方王國では頭が上らぬ、到る處土

方の大親分と『鑛夫共に主意氣云

今や冷んど土方と區別が付かぬ程

概にうつしての盛衰。

方の大親分に『鑛夫共に生意氣云はせるな』と一喝を喰ひ、一溜りもなく尻古垂れて了つた。鑛山の別天地は兎も角世間へ出て来ては

今や殆んど土方と區別が付かぬ程同化して了つた。然し土方の風儀も變つたことは申すまでもない。之も世相の一端だ。

茶人の樂

本町青々園 倉田敏助

或る夏の一夜、二三の茶友と、涼を趁ふて郊外に散策した。月はないが、空はよく晴れて、星あかりに吹いて來る風がそよそよと水のやうだ。

と、十二三の少年が、ふいに一行の行手に立ちふさがり、無言の儘古新聞をひらいて、我々につきつけるのであつた、見ると蒼古な筆觸で『粗茶一つ進したい、お立寄り下されい』とある、狐につまされたやうな話、だが物好きの一行だ『立寄りうではござらぬか』で、少年のあとにつづいた。

小さい流れがある、潺湲たる音を立て、居る、老大なる楊柳がある、スツクと天を衝いて居る、その下に新しい手桶、新しい柄杓、清水を満々と湛へてある、先づ心耳を洗へとの謎か……廉越しの灯をたよりに數歩進むと、二坪ばかりの前栽、玄關にかゝると、草庵はわづか三疊くらゐ、杉の菓子折をその儘利用したらしい煙草盆、壁間の軸物は『廻燈籠』それに之も廢物を利用したらしい茶釜、丁度湯がたぎつて松風颯々といつた

瓶にうつしての盛饗。

最初のビク／＼は何處へやら、芳酒に魅了された互の舌は滑かに覺えずときばかりおしやべりする。辭して門を出づると、月東山の上にかゝり、夜正に零時を過ぎたらしい、不思議な一夜、銘々首をひねつた……主人の名は唯『茶人宗樂』とのみ……。

◆刀劍小集記

雜筆記者

有様……主人はと見ると、黧黒な面貌、突出した口角、人間げなれがして居る上に、七ツ下りの黒衣を纏つて居る、不思議な人物であるそして寂然として茶碗、茶入、水指等を運び、これも無言で茶を點じて賜める……氣味がわるい、我れ勝ちにと尻ごみする、手の出し人がない、遂にお正客を抽籤できめる、受けて味はつて見ると、敢て不思議はない、イヤ別議はない、遂に一人喫し、二人喫し、みんな飲んでしまつた、處でそのお手前だ……その香味なら、湯加減なら、一點非のうちやうがない、どうも名古屋榊半詰の上別儀らしいと、一同の鑑定が一致した、尙又菓子に横濱風月の寶珠形らしい不思議な處で、不思議な振舞ひ、啞然たる外はない。それにその茶道具だ、茶碗は仁清作、茶入は丹波燒、香合は『樂道入之白藏主』とある、その他随分古い器物ばかり、一行は内々で涎たらしく、すると珍らしや稻荷壽司が出る、それをきつかけに海の物、山の物、野の物、川の物、して又神酒を酒

三月一日、何度目かの刀劍會——といつてもほんの小集を——三失警務局長のところで開催される▲お客さんは櫻井さん、深尾さん、そして私——衣等さんが來ないので急に電話で、前田少將(昇氏)に來て貰つた▲櫻井さんの直秀、例に依つて端麗なもの、なかごを開いて、明治四年と作銘のあつたには啞然とした▲それから深尾さんは御持參の月山——古刀のやうに見へたが、これが亦明治四十五年の作、だん／＼見て居ると、品落ちするの己むを得ない、見了つて大笑いとなる▲局長から信國の短刀と、水心子(珍らしい長銘物)のでか物の提出があり、例に依つて解説を聴く▲前田少將は、信國の脇差と、和泉守國貞の短刀を示される、どつちも上々の出来、殊に信國の方は姿といひ、地鐵といひ、壯健であること、いひ、申分はない▲但し少將自身は、どうも『左』の疑ひがあると、首をひねつて居た▲この目すら／＼といひ當てたのは櫻井さんで、衣笠さんの朝鮮一にならつて、たしかに京城一のネウチがある。

伊豆行

明治町 田中秀一郎

伊豆は吾が憧れの地です、温泉湧く海沿ひの寂しい國、そこには嘗て頼家の傷ましい血が流れました、頼朝の雄圖が畫されました、菖蒲の前の優しい花が咲いたのでした、學生時代十國時から山越しに熱海に下りた私は、滞留一、二日何となく温かい雰囲気包まれた様で、此郷の地と人にと限りない憧憬を覚えました、再来二十年、身は意地悪い世波に掀蹴されて、再訪の機縁は中々に來ないのでした。

此正月久方振りに上京して測らず病を獲、呻吟二旬餘、病後弱つた身と魂の暫しの安息所にと選んだのは、外ならぬこの憧れの地なのでした、二聲は甲ひ訝けぬ機縁を與へて呉れたのでした。薄ら寒い如月の四日、飄然三島に降り立つた私、暗闇の伊豆の山峽を豆線車に乘り、長岡の驛からガタ馬車に乗替へ名指の宿に著いたのが晩の九時過ぎでした、自然の惠澤溢るゝ温湯に暢々と五體を浸した後、客稀な静かな宿の一室に横たはつた時、そこには一切の雑念が影を潜めて、宛ら大自然の懷に溶け入るかの思がするのでした。長岡は開けてまだ二十幾年かの新しい湯所です、だか不思議に古い匂ひのする閑靜な湯所です、湯宿が七八軒もありません、丁字形になつた街並みに、名物の雁皮紙織

ふ鄙少女を見ては、菖蒲の前の面影を残ると見入るのでした。かくて春雨の一朝、名残惜しい山川を後に見返り、歸るさの旅に就きました、懐しい吾が伊豆の山々、それは慈愛籠る嵐の様に眞白い雪の額をかきやかして、いつ迄も、私の行手を見守つて居て呉れるのでした。

伊豆はよし山なみ低く梅咲きて湯の香ほのかに里をめぐれり搖籃に夢見る稚兒に似たるかな山のいでゆにひたるひと時石に踞してつはもの共の夢數多散らばふ野邊の風に吹かるゝ離々として唯草のみぞ亂れたる輕が小島の小冠者があと千年の夢を封して蒼青く墓石黙せり最明が寺

◆南畫と茶道

平田久雄

安藤京徳局長は、南畫のよい處をずの分多く所藏して居るらしい、尤もそれは、局長一代の蒐集品でなく、嚴君が學者であり、且つ南畫の愛好者であつたらしい、▲イヤ自ら筆を執られたものらしい、▲住井物産支店長は、支那にあること二十年、所謂本場を踏んで來た人として、この方の眼は、なか／＼こゝろに居るとの評がある、▲亦住井さんは、茶道の方の嗜がふかく、東京などへ行くと、その方の先輩から、あちこちの茶會へ屢々聘せらるゝらしい、▲茶といへば日本ビールの川上さんは、何でも家元筋の出身らしく、この方は、むづきの中からの修養があるらしい、▲滿鐵の佐藤さんは、御自身も趣味のひろい方だか、夫人もそれに劣らず、日本畫、音樂共に有名である。

なつた街並みに、名物の雁皮紙織

た、いで場近く小流れに菜など洗

いたが、夫人もそれに劣らず、
日本書、音楽共に有名である。

壓迫感

總督府專賣局 青木戒三

月の初めに、京城雜筆社の肩書で、石川利夫君が役所へ刺を通せられる、來たなと思つた。

京城雜筆の愛讀者たる僕は、常に一種の壓迫を感じて居る。原稿が殆んど全部愛讀者の審査になり京城に於ける既知未知の、あらゆる有力者の風手に直接する様に出來て居る爲め、益執著を深くすると共に、自分も亦何か書かされるであらうといふ壓迫感である。去年の秋、二月に涉りて、つまらぬ煙草の話を書き、廣江澤次郎君から、お株を奪つたとの抗議が來た位だから、當分大丈夫だと思つて居たのに、今石川君の訪問を受けた、來たなと思つたとは此の意味である。

今日は四日の總督のお歸りを待つて、五日から三日間支局長會議を開く豫定で、相當忙がしいからうまく斷らうといふ腹案で御面會をする、石川君は七日頃まで、遅くも十日頃までに何か書けといふ、温厚の石川君、大して強襲を試みたのでもないが、十日頃までなら何とかならうと、僕の道樂である花の事でも書きますかなと、安謐合をしてしまつた。一體僕は記者諸君を斷るのに、相當自信のあるつもりだか、かう手もなく陥落してしまつたのは、平素から壓迫を感じて居たからだと思ふ。

お約束をした翌三日の夕方、九

つになる女の子が、お友達の内へ御節句に呼ばれて行つたのが、歸つて來てほんやりして居る、熱をとると九度五分ある、翌四日早朝

醫者に見せたらチフテリアである下の兒に傳染の虞があるから直ぐ入院だと、待てしほしもなく、妻君と一緒に病院に連れて行かれてしまふ、あとに残つた八つ下の兒は自然僕の受持といふ事になる四日の晩は總督が歸つた、五日からは支局長會議である、朝夕は病院を見舞ふ、會議關係の宴會も多い、身體を宅と役所と病院と料理屋に駆けめぐらす、花の話を書くところではない、心に不斷の壓迫を感じながらも、日は遠慮なく經つてしまふ、九日の夕になつて

僕の受持の八つになる兒が九度の熱を出す、さては感染かと即刻醫者に見せる、まだチフテリアの徴候はない、多分普通の風邪だらうといふので一安心する、七日で終る筈の會議が都合で十日までかかる、其の日の午後陸軍記念日へ行つて、あとは病院の見舞、これ十日の日も暮れてしまひ、約束の日限が完全に経過してしまつた、石川君にはすまないが、事情止むを得めと自ら韋解し、心の壓迫を免れてホツとする。

漱石の『我輩は猫である』に、例の苦沙彌先生が妻君に芝居行きをねだられた話がある、勿論文章

は忘れたが、筋はかうである、苦沙彌先生妻君度々の懇望だから、止を得ず芝居行に同意する、妻君大悦びで第一公式の満齋師を施して、あなた三時までに行かないと切符が買へないから駄目ですよと來る、之を聞いた苦沙彌先生急に腹が痛くなる、かゝりつけの甘木先生を呼んで見てもらう、どうもよく分らんが、痛いのならこれでも飲みたまへと一服盛つて歸る、妻君は側につきつききりで、まだかゝと責め立てるが、先生のお腹は中々直らない、其の中三時の時計がチンチンチンと鳴ると、お腹が忽ち直つた、妻君そんなら出掛けませうといへば、もう三時だから駄目だらうといふ、温良貞淑なる妻君は、何んにもいはずに、すぐあきらめたところ、苦沙彌先生のは故意である、僕のは自然の成行である、原因に於て非常の差があるが、結果に於ては所謂同巧異曲頗る面白いと密に悦に入る。

約束をすぐること一日の今日十一日、石川君再度の來訪を辱ふする、期日が過ぎてから、何の躊躇もなく涼しい顔をして御面會をする、大威張で事情を話したが石川君は、苦沙彌先生の妻君の様に柔順でない、温良ではあるが頗る頑強である、二三日中に何かといふ、病院の子供も未だ出ないし内の子供もまだ悪いしといふと、短くてもよいから何でもといふ、一度壓迫を免かれた心が、またひととこれを感じる、遂に壓迫に伏して、書けなかつた言譯でも、今晩中に書きませうと約束東としてしまつた。夜病兒の枕元にこれを書きつけて現下の壓迫を免れんとする、しかし次に來るべき壓迫が今から氣になつてたまらない。

そろろ盤

總督府遞信局 蒲原久四郎

算盤の發祥地は支那で、時は元、明の頃だと云ふ。それが日本に傳はつたのは今から凡そ三百年前、豊太閤の家臣毛利勘兵衛と云ふ人が熱心に之を研究し門弟に傳授したのが始まりで、其高弟の吉田光由と云ふ者が『塵却記』と云ふ書を著してから、廣く世間に用ひられる様になつたといふ事である。往昔の寺小屋などでは算盤は漢籍と共に、重要な學課の一つとされたもので、其頃の算盤は大抵大粒の珠で二十五桁のものが多く用ひられ、梁の上の五珠は二箇宛有つたものだが、今は實用主義から其向々に色々の桁數のものが用ひられ、珠の大きさも大小種々あるか、堅一分五厘横三分から四分位のものが普通で、梁の上の五珠は殆んど一箇に限られて居る。材料は梓は重に黒檀黒柿等、珠は紫檀、黒檀、拓福

梅、柞等が多い。形状から云ふと大體昔と變りはないが近頃案出された物に斜形の算盤がある、是は三桁毎に珠を色別に染めて位取りの星を省き、軸に約十度の傾斜を附けて、運算の時指の自然の働きに適應させると云ふ考案である。最近又梁の下の珠を四箇宛にしたものを見受けるが、これは専ら加減算に使用するに至極適當ではあるまいかと思ふ。僕の先輩飯田精一といふ人が獨逸に留學中、獨逸の遞信省で、日本算盤の事を話し、獨逸の計算機と競争して勝つたので、初めて日本の算盤の効能を見て知つた獨逸遞信省の人は、大に感心をしたが、偕て翌日飯田氏が出頭して見ると早速の質問に逢つた、白く『下の方の珠は何故に五つにしてあるか、四つでよくは無いか』との事である『それは斯ふ言ふ譯である、下の五

つは上の一つに相當するからだ』とか、何とか説明を盡したが、先方では納得が出来ない様子である。曰く『あなたが算盤を使用される時に、あなたの指は一度も一番下の珠に觸れなかつた様である、自分達がやつて見ても、事實不用の様である、あなたは如何に考へられるや』との事であつた。ナァァル程、之は面白い處に氣がつかれた、御説の通り四つでよからうと賛成した。そこで獨逸の遞信省では早速と下の珠を四つとして製造し、飯田の名前を取り、リーダーと名づけたといふ事である。飯田氏は歸朝してから、四つ珠を試験した、僕も實際家に試験して貰つた事がある、舊慣に捉はれた人は、今迄のが便利だと稱する様であつた、近來に至り段々と日本にも用ひられ、朝鮮でも、いくらか之を使つてる向もある相である。勿論之は加減算に用ひて利便問題が生ずるものであつて、乗除算に之を用ふるのには不可能の場合もある事かと思はれるが、加減算に用ゐては、慣れさへすれば確かに効能あるものと考へる。

無外會頭

殖産銀行 中 島 司

を伸べて抱き上げ、その頬をペロリと舐め、「ヤツなまくさいぞ、さかなを食べたな、ハハ、ハハ、」と豚兒爲めに目をパチクリなり一例以て斯くの如し矣。

豪放にして細心、「イエス」と「ノー」とを斷ずること明快無比、一言を重んじ「二諾なく、友情

の爲めに涙を吝ま

ず。多く歴史を讀み、偉人言の行に通じ、最も西郷南

州翁を崇敬して『慈父』と呼ぶ。

漫畫子のために

は先輩也、妄りに漫文漫畫を弄して後日雷聲を以て叱

られむことを恐れ、之を以て叩頭擱筆すと云ふ。(一)

四、三、一五)

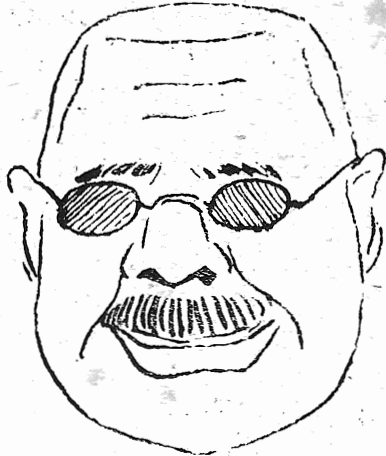
尋常にあらず、曾て予が草

舎に來り、偶ま支關に豚兒

○ 京城商業會議所の渡邊會頭、自ら號して無外居士といふ。雷名四方に轟き、威勢八方に振ふ。其の人を紹介する、豈に敢て今更漫畫子の拙筆を要せむや。

○ 一たび激すれば雷聲南山を搖撼し、六尺の男子も爲めに顔色を失ふ。然かも破顔微笑すれば春風堂に沿ねく、三歳の童子も以て鞞しみ慄く。小兒を愛すること

を發見し、『ヤア、いゝ子だなあ、いくつだ、四ッ？ そらドッコイシヨ』と互手



朝鮮の温泉

總督府地質調査所

駒田 亥久雄

海雲臺温泉

釜山東萊間は三里内外を隔て、居るが、此の兩地と共にほぼ正三角形の距離を保つて有名な海運臺温泉がある。東萊温泉と異りて日本海濱に位して居る爲めに風光實に絶佳なる閑靜の土地である。但し閑靜といふ事は一面に於ては温泉場又は遊覽地としては邊僻であるか又は未成品なる事を意味するものであるが兎に角海と山と河との配合で朝鮮では稀に見る程の形勝を具へて居るのは此の海雲臺温泉場である。

温泉發見の時代及變遷の歴史に就ては未だ十分に調べて見た事もないが例の『東國輿地勝覽』中には後に記載してある通り頻りに海雲臺の風光を詠じたる詩を收めてあるが温泉に關しては片言隻句の記載もない。依つて按ずるに温泉は其の後の發見に係るやも計られぬ。

唯口碑の傳ふる所によれば何時の頃かは不明であるが高官が屢々來りて温泉に浴し其の都度地方民に對して苛酷の賦課をなす爲め地方民之れを厭ひ、遂に湧出温泉を埋没する事となりし故に爾來温泉場としての海雲臺は全く里俗に忘れ獨り東萊のみ天下の温泉として持て囃された様である。

然し海雲臺の海雲臺たるは單に

温泉の有無のみによりて評價せらる可きでない、彼の海波鏗々として岩を噛み飛沫集散して雲霧を生ずる如き雄大なる景色の所有主である、海雲臺半島を中心としたる景致こそ實に此の地の生命であらねばならぬ。

海雲臺に關する古記録や詠詩は左の通りである。

海雲臺——縣東十八里有山走入海中。若蠶頭。其上皆冬柏杜仲松杉。葱龍蒼翠。四時如一。春冬交則柏花積地。遊人馬蹄。蹴踏三四寸。南望對馬島甚近。新羅崔致遠嘗築臺遊賞。遺跡尙存。致遠一字海雲（古訃）

○ 鄭 誦
落日逢僧話、春行信馬行、煙消村巷水、風軟海波平、老樹依岩立、長松擁道迎、荒臺漫無址、猶說海雲名。

○ 崔 恒
登來不必御冷風、拂盡東華舊戰紅、醉踏金釐未已、紫簫吹徹海雲中。

○ 權 攀
波恬鏡面淨無風、坐見扶桑日浴紅、馬島如眉青一抹、乾坤納納入胸中。

○ 僧愈好仁
珠宮闕貝浩漫漫、四面圓蒼作護闌、山勢北來蟠地軸、浪波東盡豁乾端、儒仙一去雲烟老、遼鶴千年歲月寒、雲落山茶春已晚、

(1103)

吟詩老我及遐邇。

○ 曹 偉

紅塵廿載久聞名、一蹶鰲峰眼忽青、不用燃犀窺海瑟、應須鼓怪撼湘靈、雲開鸞鶴歸三島、天闊鷗鷗簸九溟、東望安期知不遠、丹成何日掃修翎。

○ 姜 渾

眼窮溟渤浩漫漫、駭浪吞空勢未闌、對馬青山孤雁外、扶桑紅日靄雲端、招邀笙鶴天風冷、驚起魚龍鐵笛寒、千古儒仙分物色、欲追高步奈蹉跎。

即ち海雲臺の出所は新羅時代である事が分る。然して詠詩の何れもが海雲臺の景致を描寫し得て遺す所更でない様である。又是等の詩によりて考ふれば既に新羅時代より名勝の一として入口に膾炙し殊に文人墨客憧憬の地として訪客を絶たざりし事も察せられる。

海雲臺半島の西方は所謂水營灣であつて是れに注ぐ水營江畔に位する左水管は其の昔鎮守府たりし所今は廢墟に等しいけれど猶名所の一として擧げ得可く又江の左岸一帶の松林は松露の名産地であつて灣内の漁獵と共に優に一日の清遊に適するのである。

半島の東は即ち『温泉の濱』と私が命名した白砂青松州映じて直接に澎湃たる日本海に連なり四時共に逍遙に適する場所であつて磯傳ひには漁船が眞帆片帆にて常に往復して居る、正に一幅の畫帖を展開した様な感がある。

斯かる畫幅に等しき景観を有する海雲臺から何故に長い間温泉を葬り去つて顧みなかつたか私共には甚だ了解に苦しむ次第であるが數年前釜山の某有志によりて試錘作業が決行せられて以來温泉場として命脈を今日迄保持したのは誠

京 城 雜 筆

に購買に堪へない。更に海雲臺が眞に温泉場としての價值ありや否やに關しては地方民諸氏の熱心と慶南當局の後援とにより一昨年度質調査所から私自身が出張して詳細なる調査を遂げて其の結果は既に出張するばかりになつて居る。

私が温泉調査の爲め海雲臺に滞在した期間は十二年九月下旬から翌年二月初旬に至る長期に亘つた出張としては可なり長い方で其の間は勿論重大なる職務を帯びて居る關係もあるが心持よく在住民諸氏の懇情の下に起臥するを得て一度も場所を飽きたと云ふ感じを抱いた事がなかつたのは云ふ迄もなく多種多様の景色を適く所として求め得たからに相違ないと思つて居る。

そこで私自身の海雲臺の調査も將來と云はず現在に於ても必ず海雲臺温泉の由來誌の一頁を割受して貰へる事と思ひ滞留中の即興たる海雲臺三題なるものを左に掲げさして頂く事にする。そして咽目場のお方に鴨綠江節で詠つて貰ひ度いものである。

(一) 來て見れば、噂に勝る海雲臺
海と山とに圍まれて
中に湧き出る湯は世に稀な
實際又ラヂウムぢや東洋一。

(二) 今日ば瀑、明日は曳綱松露狩
沖にや釣するサワラ船
波に映るは松の影
ホニに又眺望ぢや東洋一。

(三) 荒れ狂ふ、浪を枕に旅衣
たつや雁が音に夢破られて
残るは月の影瀾の音
眞實又海雲臺は東洋一。

題 外

須磨明石。舞子の濱も何のその湯の濱傳ひにや眞帆片帆磯ぢや白波蹴上げて海女が同じく又苦勞を主の爲め。

要するに東萊は既成品であつて海雲臺は未成品である。東萊は温泉場としては著名であるが遊覽地ではない。海雲臺は温泉場としては今日猶貧弱であるが遊覽地としては得難き場所である。一は人と共に人を對手として楽しむ處であ

るが一は自然と共に自然を愛づる境地である。彼れは四疊半で低吟淺酌するか泥醉亂舞するに適し是れは濱邊で詩囊でも繙くか又は閑雅の境地に戀でも語るには詠へ向きである。前者は飽く迄『動』と見る可きであるが、後者は『靜』であつて尙俗化せられざる『動』を包んで居る所に兩者の特異の點が窺はるゝ様である。

東 將 棋 た よ り

將棋七段 溝呂木光治

◎將棋界最近の目ぼしいことは、大崎、金、花田の各七段が、一齊に八段に昇格したことであります。

◎關西でも大阪の木見七段が、やはりこれと前後して八段に昇進。

◎これで、日本には名人(九段)一名と、八段八名といふ大盛況になります。つまり東京に關根(名人)土居、大崎、金、花田(各八段)の四名と、大阪に坂田木見(各八段)の二名、それに素人筋の八段二名といふ勘定です。先づ前古無比といつてよろしいでせう。

◎新八段の花田君は、マダ三十そこ、前途有望の士で、先年阪田氏を平手で

破つて居ます。次に囑望せられるのは、七段木村義雄君です、これはやつと二十四歳です。

◎創作家の間で、將棋が大はやり、久米さんも、菊池さんも、里見さんも、小川(未明)さんも、プロレタリアの前田河廣一郎氏も、みんなやります。中で強いのは菊池(寛)さん、これはさつと初段の力量があります。隔日位に四段の萩原君が行つて、稽古をつけて居ます、久米氏、里見氏、小川氏など、先づ菊池さんに二枚または兩桂位でせう◎幸田露伴氏二段、馬場孤蝶氏と初段といひますがマダ拜見した事はありません

京徒然草

殖産銀行 守屋 三葉

【三】

のうめきもなし。山河悠々、鳥雀
孳々、何とはなし閑寂の氣に満つ
るは朝鮮の旅ならずや。

嶺を隔たる歎愁場と心得るはよか
らず。朝鮮古史を按ずるに豊太閤
征韓の役驍騎小西この山を越へて
一擧に京城を突かんとす、今の青
年この山を越ゆるもの身初めて朝
鮮にありと心得べし『ナポレオン
』の『アルプ』越えにあやかりつ
ゝ『朝鮮が見える』と叫びつゝ、揮
をしめるが肝要なるべし。

さはれ現實の秋風嶺は誠に殺風
景なり、禿山四周の盆地に粗末な
る停車場の寂しげに立てるは情な
し。この地に欲しきは櫻なり、楓
なり、春爛漫の櫻花山麓を埋め、
落花繽紛車窓にかゝり、秋爛爛の
紅葉山嶺を蓋ふて、金風颯々行人
の袂を拂はゞ秋風嶺はかくて永久
に詠歎の詩境たるべし。

旅心にも似て長閑けきは京釜線

車窓の眺めなる哉。街より街に田
園さへ殆ど都會化したれば唯難踏
の唯中をひかれ行くが内地の旅な
り。狹軌の列車全速力を擧げてひ
た走るに心より先づ身が静まらぬ
が内地の汽車旅行也。海あり山あ
り傳統的の名所舊蹟枚擧にいとま
とてなければとすべて俗化したるが
内地の自然なり。清楚閑寂の趣き
など遂に求むべくもあらず。

京釜線中最も詩情をそよめるは秋
風嶺なり『秋風吹きて盡きすすべ
てこれ玉關の情』など立ちどころ
に漢詩的詩情をそよらすや。朝鮮
古今の詩人がこの詩境に立ちて如
何吟じたるかは寡聞知るところな
けれど、最近愚兄の歌に、
君は西われは東に別れ路の秋風
嶺に涙落しぬ

降らぬに雫する頃、大地ぬくみ
て謔譏となる頃、連翹咲き出でゝ
春は先づ京城に入るなり。雖にほ
ころぶ梅が枝のおもむきは無くも
畔のほとり丘の邊などむら消の雪
の中を小さく黄色く咲き出でたる
あはれならずや。

そこは朝鮮なり。廣軌の列車す
ると町に入り音もなく街をす
べり出づ。大方天氣清朗なれば日
蔭先づうらゝかに玻璃を透して室
内にかゞやう。柔かき座席に身を
投げつ、ゆたかに煙草などくゆら
せば紫煙大らかに輪を描きつ、ゆ
らめきく消え失せぬるもよし。

支那公使館など赤くさびれ立つ
庭の面に日影浴びつゝ主人顔なる
連翹はよし。高殿の木の間にぐれ
に聳え立つ昌慶苑のあたり置かれ
たる殿のほとりまだ朋えやらぬ芝
生の上にかざしの如く咲きいでた
る連翹もよし。

○

櫻谷の散り行く頃、昌慶苑の花
吹雪くころ、牛耳洞の見頃なるも
よし。京城の春はかくて牛耳洞に
逝くなり、暮れ行く春の姿をしば
らくこゝにとどめつゝつきぬ名残
を惜むとも見ん。北漢山の巨巖危
ふくそより立つところ、名もなき

野を走り谷を渡り山を行く人に
願いたるところ微かにして唯あり
のまゝなる大自然を觀る、山は呆
然として大雨のなぶるにまかせ川
は嘩然として白沙のあふるるに甘
んず。危巖突兀千古の色にいで松
柏くねりて一樹一趣を寫す、山麓
の彼方、河畔の此方、いぶせき巖
屋の二三つ番に煙をあぐるもあ
り、屋上の芥子など日影浴びつゝ
一入赤きも得がたき眺めならずや
賣鬻や肥料の廣告にわづらはざる
ゝ自然もなく屋上屋を重ねる人類

この山を越ゆるものすべて袂別
の心境にあるへし、素盞男命あら
ばこゝにて『吾妻はや』となげか
せ給ふべく、小夜姫あらばこゝに
て『ヒン』振り翳しつ石となるべ
し。銀鞍白馬千里に使用するものこ
ゝにて馬を下り最後の名残を愛人
に惜しむと心得べし。さはれ秋風

自然もなく屋上屋を重ねる人類
に惜しむと心得べし。さはれ秋風

かくそより立つところ、名もなき

小川の石を洗ふて流れ行くあたり
彼方の峯此方の道の邊一もと二も
とつゝ、しのびやかに咲けるはよ
し。麥の芽の二寸三寸のびたと
ころいぶせき農家の花に埋れたる
胡蝶の花よりすみれに戯れいでた

る、しづやかなる春の眺めにやは
あらぬ。花に榮華の姿なく野に靜
寂の靈氣漂ふ。實に牛耳洞は詩人
の境なり、哀愁をよりに湧いてつ
くるなからん。

宿屋哲學

京城日報社 田中守寛

旅館を料理屋と同じやう
に心得てゐる向が少くない
こんなお客さんが多いと、
自然女中の素質を悪くする
ソコで嚴格な旅館には矢張
り眞面目なお客さんが泊る
ことになる、吾々は職掌柄

女中だつて人間ですからさ
う頭から馬鹿にされるとつ
い腹が立つてお世話をして
あげたいと思つてもソコは
人情ですからイ、加減にも
てなすことになります。

旅行する場合が非常に多い
旅行中は旅館が我家である
から家庭に居る心持ちで内
外の仕事に當るのである、
だから女中のだらしない
旅館に泊ると終始不愉快で
仕事をしなければならぬ

お酒を澤山召しあがるお
客さんにも困りますが夜遅
くなつてお酒を望まるゝ方
にも困ります、こんなお方
に限つて變な事ばかり仰せ
られます、勿論お酌は致し
ますが心を狂はせぬやうに
していたりきたいものです
お客さんだつておやさしい
方がどんなにお徳か知れま
せん……と。

女中曰く……お客さんの
中には随分我儘なそして勝
手な事を仰せらるゝ方が御
座いますけれども傑いお方
になる程おやさしい様に思
ひます、旅館で威張るお客
はお家庭で奥さんに頭のあ
がらぬ方が多いさうです、
妾共が一番腹の立つのは言
葉遣ひのぞんざいなのです

女中の不平は尤もの様に
思ふが之は旅館道徳が缺け
てゐる處からよくない習慣
をつくつたものであらう、
ともかくもこんな悪風は矯
正しなければならぬ。

書房日録

永樂町人

△△日。快晴
子供が櫛側に出で、日光浴を遣
つて居る。歌ふて曰く、

桐原センセ、博士ニナツテ、内
地ニ行ツテ、オ酒ヲ吞ンデ……
覺えず失笑する。

桐原先生とは、總督府醫院整形
外科の、桐原新博士の事なり。こ
の兒脚部を病んで一年、知己近隣
の少年に全くなく、その語る所醫
家、看護婦、藥劑師のみなるは、
あはれなり。而して病患未だ全く
癒へたりといふ可らざるに似たり

△△日晴
午前中、今村(鞆)先生ひよつ
こり來訪せらる。雜筆の御常連な
れど、御意を得るは、けふが初め
て也。甚しい哉小生の非訪問病耶
……先生と一時間許り話す。午後
田村さん入來、例の土亭先生の易
書に就て、共に與に吉凶を下す。

△△日曇天
有賀殖銀頭取のところにて、浮
世繪のつどいあり。同好の一人と
して、召喚せらる。安藤、住井湯
村、瀬戸諸氏の顔見ゆ。晚餐早上
頭取住井さん、湯村さんに向つて
原稿を薦め『どうか助けてやつて
下さい』といふ。——誰れか有賀
さんを冷靜といふ。僕はこの情に
浴すること、十六七年。夙に斯人
の眞骨頭を知るつもりなり、涙ぐ
まざるを得ず。

△△日晴
原稿續々來る。——夜、内地よ
り木南君來る。先年歸省せし時、
二度面會せしことある人なり。
朝鮮にて就職したしといふ。放つ
ても置けまいと思ふ。

小松侯爵

朝鮮經濟日報社長 小野久太郎

(二四)

りて、雑談を交はされ、天風先生の武骨な言葉に興がる、といふ有様である、侯爵御息の如き篤々として、船内を駆け廻り、『オデチャン』と天風先生に縋るなど、實に馴れ／＼しき裡にも尊嚴を傷けぬ御態度には、流石は皇族の御連枝であると思つた。

食堂に入るや閣下と男爵と先生と私は同じ食卓に就き、侯爵は細かき點に迄御氣付き遊ばされ、ウエーターに對する態度なども實に叮嚀にして、京城の會員より献上せし三浪津の梨を玩味され、稱賛されつゝ令夫人に勸むるなど、實に間髪を容れざる御態度は、返えず返えずも感激措く處を知らぬ。

私は斯くして前後六時間に亘り侯爵の御相手申し上げしが、朝鮮論より、政治、經濟、宗教、社會の各般に亘り、世相に御理解深く下情に御精通ありしには實に意外に感じ奉つた。

私は斯く無上の光榮に浴し閣下の平安を祈りつゝ、香取丸を辭するや、折柄風荒く浪高く、ランチは浪に翻弄さるゝ状態であつたが、閣下は上甲板に立ちて、我ランチを送り給ひ、影の微かなる迄上甲板に御佇立あらせられしには吾等とは勿論、ランチの同乗者凡ての感激せし處である。

今や閣下の御座船は、印度洋を航行中なるが、けなげなる令夫人令息が如何ならんと案ぜられ、一路萬里御平安を神かけて祈り奉りて居るが、私は最近これほど深き印象をのこせしことなく、更に皇族御連枝の御態度に對し、感激措く處を知らず、我朝鮮在住者に、此の感激を分つべく、先聲永樂町人の雜筆に、此の稿を寄せることゝしたのである。

我が皇室と國民とは近來益々接近し、君臣の間を遮ぎりし堅き障壁と深き溝渠が次第に取去られつゝあるは、實に喜ばしき限りで、斯くてこそ帝國は天驥と共に窮りなきものと私は信じて居る。

私は若年の折皇族に咫尺した場合もあつたが、境遇一變、朝鮮に移りて以來、既に十六年を數え、輻軻不遇の裡に歲月を送りし爲、遂に皇族に接近する機會は絶えてなかつた。只新聞や寫眞で、皇族御連枝の平民振りを知るのみであつたが、去る三月二日偶然にも、

歐路の旅につかるゝ小松侯爵輝久閣下を、門司沖假泊の香取丸船中に奉伺し、御陪食の光榮に浴せしのみならず、記念の御撮影に同じレンズの中に入る事迄許され香取船中六時間に亘りて、閣下と御對談、身に餘る無上の光榮に浴した。小松閣下は心身統一哲醫學會の名譽會員にして、吾々の師事する

中村天風先生の教義に心服し給ひ其の教義を普ねく國民に傳え、國民精神の作興と健康國民の養成を計らんといとも熱心なる心身鍛錬家にあらせられ、皇族に對しても北白川宮家を始め、先生を紹介して御前講演を開き、三位一體、以て帝國の隆興を計らんとし給ふて居る。

我が京城に於ける哲醫學會々員は、閣下今回の御洋行を奉送し、

一路の御平安を祈り奉るべく、協議の結果、朝鮮の物産を献上することとなり、私が其の代表者として、折から滞城中なりし天風先生と共に香取丸に奉伺したのであつたが、閣下が師弟の情誼に厚く、而も平民的にして、我等に對し頗る殷懃なるには、之が竹の園生に生ひ立ち給ひし、元の北白川宮輝久王殿下であることに思ひ及びて實に感泣し咽びし譯である。

私が天風先生と共に香取船上に奉伺すると、閣下は直ちに引見せられ天風先生に對しては、全く師の禮を盡し、打寛ぎて先生の教義に對し、質問を繰返され、更に私に對しては、朝鮮の事情を細々と御質問するなど、實に客を外さぬ御應接振りは、いとも清く、尊く私は從來之れほど圓轉なる方に接したことはなく、只潜かに感泣し咽びしのみである。

スモークング、ルームに入れば御自ら煙草を買求めて、師に勸め客に分ち、歡談笑語次から次へと續きて盡きず、御附武官は海軍大尉駿島具重男にて、岩倉具視公の令孫なるが、侯爵は全く友人に對するが如く、男爵が御撮影せんとすれば『お公卿様が何で寫眞が撮れるか』『お公卿様が寫眞師になるのだから世は變つた』と盛んに聊次り、一堂和氣鬪々、其の間侯爵夫人や男爵夫人も時々室内に來

は、閣下今回の御旅行を奉送し、
爵夫人や男爵夫人も時々室内に來
ましたのである。

朝鮮へ來た畫家

東洋畫家 加藤松林

朝鮮へ内地または外國の有名な畫家が旅行に來ることは、何等かの意味で歓迎すべきことだと思ひます。勿論、多くの中には随分現實暴露のつまらない人もありますけれども、大抵私たちにとつて何物かを残して行つて呉れるものがあります。

西洋畫の石井柏亭氏は二度來ました。鮮内大概の名所舊蹟は見廻つて、滞在も二三ヶ月つづは居たやうです。二度目の時は寫生にくつついて行きました。畫を作る速力も早く、てきばきと畫面を片つけて行くのは見てゐても氣持がいゝやうです。

歸つてから畫と紀行文を集めた本を出してゐます。朝鮮特有の氣持なども比較的 understanding してゐて、確かに尊敬すべき先輩であります。小杉未醒氏も支那の歸りを寄つたことがあります。作品としては何も見受けられないやうですが、一體非常に東洋的人です。今から今に何か製作するかも知れません。近くは鮮展の審査にまた岡田三郎助氏和田英作氏、長原孝太郎氏など、然しこの人たちも單なる旅行者で審査したといふ以外には何物も残つてゐないやうです。

東洋畫では大分來たやうです。ずつと古くは故佐久間鐵園氏、平福百穂氏、死んだ玉葉女、關雪氏、栖鳳氏なども支那の歸りを寄りました。

した。このうち時々作品を見受けるのは百穂氏位、そして、この人が一番よく朝鮮をも理解してゐるやうです。

最近にはこれ又鮮展審査に來た川合玉堂氏、小室翠雲氏などあります。川合氏はその年の帝展に朝鮮を題材にしたものを發表して古くはあるが堅實なる作風を示しました。小室翠雲氏には何も作品を見受けません。反對に、鮮展の審査料を早々請求したといふ風評があります。どうですか。

朝鮮といふものが一般に理解されるに従つて、これからは往來益

々多くならうと考へます。中には随分いゝかげんな人もあつて、嫌子を知らない在鮮觀望家に迷惑かけるやうなことがないとも限りません。近い例では山田寒山といふ人など、いゝかげんな物を高く賣りつけて、買った人は弱つてゐます。作品も手段も随分人を買つたものでした。

こんなふうなことは少しの注意によつて避けられることでありませ、と同時に一般人士の批評眼を高めてゆくことが何より緊急であると考へます。

朝鮮にとつて一番難有い人は朝鮮を愛する人です。單なるエトランゼエではなく、落著いて此處の土に親しむで呉れる人です。かゝるいふ人の一人でも多からんことを願ひます。

朝鮮に住んでゐる畫家も、もし此處に落著いて、仕事の結果に惑はされず、地味な勉強が續けて欲しいものです。

連翹

朝鮮銀行 松原純一

鶺鴒ありく癖まはり連翹咲かうとする
連翹咲いて南山へ庭からの近道
連翹咲く頃のはやり風邪にあらず
家の日蔭の連翹に松葉積み崩れたるまゝ
連翹さいて城壁に押され住む家
けふも風上げ風の連翹つゝじ
薬水へ松の中の徑の連翹

僕の結婚披露會

朝鮮銀行 飯泉幹太

僕が隣の緒切つて初めて結婚披露會に招かれたのは、今から丁度廿七年前の秋の央、場所は下谷鶯谷の伊香保温泉であつた。花婿は禮助(前代講士、當時の法科大学々生、風間禮助)で、花嫁は彼の有名な萬龍を娶つた恒川法學士の姉種子さんであつた。奇妙の事には披露と云つても花嫁は來ない。花婿が獨り素足に紋付、羽織、袴を無恰好に著けて、酒呑の親類を伴れて來て居た。客は親しき大學生ばかり、挨拶を抜きに、直ぐ會席料理に武者振り付いて饅喰ひ且つ呑んだ。僕は此時初めてコゲ臭い、黒ビールと云ふものを呑んで歸りがけにトウ／＼梯子段から轉ろがり落ちた。

其の翌年の春、僕が妻を娶つた僕は自分で妻の両親と本人に直接談判して婚約したのである。でも先方はタツタ一人娘であるのと多少舊慣にとらはれておるので媒酌人がなくてはとの話があつたので、後から杉浦重剛先生を媒酌人に頼んだのである。當時僕は極長の貧乏で、夜學の教師などして苦學をして居つた。所で此の貧乏學生が妻帯したと云ふので、肩を怒らかして只譯もなく、女を蹴らしたと考へた(?)友人間に色々の議論があると聞いた。ソコで前招された事を憶出し、僕も一つ披露會を遣らうと云ふ野心を起し、母と

妻に相談した。丁度其の頃僕はク／＼坊主で激雨の中を赤毛布を頭から引冠つて大學に通學した事があつたが、安毛布のお蔭で頭から顔一面眞赤に染まつて講堂でよい見世物になつた事もあつた。又書生が錢湯に行くなどは階級の極だと豪語して一年間も、寒空の野天に冷水浴を敢てした事もあつた。此んな工合で料理屋などは思ひも及ばず、自宅で茶話會を開く事に決めた。其招待狀の文句は今、カと覺えて居ないが、文意は大體下の通りであつた。

『今度家の都合で鈴木秀子と結婚した、將來自分同様御懇親を願ひたい。就ては何日何時自宅披露茶話會を開くから是非御光來を願ひたい。ウソ偽りのない遊茶と煎餅丈けである。但し之れで満足出來ぬ方は自分の好きな物を持つて來て食ふなり、飲むなりするのは勝手である。其の代り、紀念品とか何とか、苟くも君達の懐を痛める祝品は眞ツ平御免を蒙る。』と云ふのであつた。流石物に動せぬ母も妻も之には驚いて但書以下の削除を極力哀願したが、僕は平氣で出して仕舞つた。

此招待に應じて來たのは僕と妻の親友の學生許り。其の主なる者はモツシユウ(駐米大使松平恒雄(隆一)桂侯の愛婿長島隆二)和

【二六】

三郎(前東拓青島支店長安川和二郎)直(東京控訴院檢察長小原直)傳六(熊本醫科大學長長澤傳六)コバ錦(臺灣銀行監査役小林錦)四郎 卯平(第一回労働會議労働者代表樹本卯平)駿一(杉浦先生愛婿大阪外國語學校教授上田駿一郎)源公(三重合同電氣會社社長小島源三郎)宇都宮多影子女史及其女塾友等で、學生でないのは只一人治(李王職次官篠田治策)であつた。治は一年前に卒業して下谷で辯護士を開いて居つたが、見榮を張る職業病、拘車で、新夫人帶同威勢よく乗込んで來た。

此の無邪氣なお客の放り出した土産を開けると酒、麥酒、濁酒、牛肉、豚肉、葱、豆腐、コンニャク、大根、漬物、干物、果物、菓子、燒芋など、山と積まれた。母と妻と妻の友達は、あはて、諸所方々をかけ廻つて鍋、七輪、徳利を借り集め、ヤツト準備が出来たソコで僕と妻は略服で(僕は後にも先にもタツタ飛白給一枚しかなかった)只『よろしく』と挨拶をした。するとお客は酒を注いだ茶吞茶碗をあげて『ヤーおめでたう』と云つた切り、至極簡単なもので今日の如く、七面倒臭い空世辭の交換はなかつた。僕等夫婦は此瞬間實に一種云ふ可らざる心からの嬉しさを感じた。而して直ぐ無禮講に移つた。天下國家を論ずる者、青年の意氣なきを罵倒する者悲壯なる詩吟、劍舞、居合、柔劍道の型、八百屋お七カラクリの謠各地の盆踊、益壽女學生の合唱などで深更迄大騒ぎをした。而して一番酔ッバラツたのは花婿の僕と紳士の治であつた。妻は平氣だつたが治の令夫人松枝さんは未だ十七八歳だつたので馬鹿に氣にして

袖を引いて切りに隣宅を促したが

紳士、淑女を招待する事が流行す

ふものではないかと信するのであ

袖を引いて切りに歸宅を促したが更に效目がなかつた。此の日主客共に驚いたのは杉浦先生が僕等の爲めにワザ／＼高等工業學校に造らせた大花瓶に大きな松の枝を挿し、之に赤燐鹽一俵を添へ、塾生數名に軍歌を合唱させつゝ贈られた事である。餘り大きなので室内に入らないで庭先に置いた。其翌日此鹽の贈物に付て我等夫婦間に議論が起きた。僕は、女房に甘い面を見せるな、何日も鹽を嘗めた面をして居れとの諷刺だと云ひ、妻は鹽が體に必要である如く、妻は家庭になくてならぬもの、大切にせよとの謎だと主張して互に下らない、トウ／＼先生に聞かすかとまで進んだが聞かぬが花と其儘泣き寝入になつた。

僕等は此んな無茶な披露式を遣つたが、二十餘年間睦まじく、子供も十三人擧げて極めて圓滿なる家庭を作つて來たのである。妻は家事の外に跡見女學校に教鞭をとり、貧乏世帯を助けてくれた。丁度其頃森律子が生徒で妻のアカギレだらけの手を見て驚いたと云つて居た。随分其間には人知れず苦勞もし、泣いた事もあつた。別けて短氣の僕は就職後上役の專横、無理解を憤り幾度か辭表を叩き付けん怒つたこともあつたが、何れも母と妻の慰撫によつて今日に至つたのである。妻は無口のため無愛嬌者と誤解した者もあつたが同情に富んだ能く働く主婦であつた、僕は其内助の效に對しては亡き今日まで感謝して居るのである。近頃一夜の披露宴に數百金、數千金を投じて得々たる者が少なくない、而して新夫婦の親友をソツチ除けにして、親連が餘り親しくもない高位高官若しくは富豪知名の

紳士、淑女を招待する事が流行するが、僕には何んの意味だかサツパリ判らない。元來僕は披露宴無用論者である、若し事情止むを得ず之を爲すなら眞の茶話會式にして新郎新婦の名で其親しき友人を主として招待するのが其趣意に協

胡沙笛の故事

第一銀行支店 島原鐵三

胡沙笛の歌にて古書に見えたるものの中に

こさ吹かば曇りもやせん
陸奥の蝦夷にな見せそあ
きの夜の月

と云ふのが、何人の歌なるや明白でない、又胡沙笛は何處より傳はりたるものか信憑する所がないが東遊記に書かれたるものに據ると、此の歌は爲家卿のよめるものであると云ひ傳ふ。又蝦夷人には種々の奇術があり、その中に口より霧のごときものを吹き出す術があると云ふ、敵手に逢ひ猛獸に出會ひたる時にはこの霧を相手に吹き我が身を隠し、その難を遁るゝことがある、これをコサ吹くと云ふ。又或説に蝦夷人木の皮を巻きて笛を作りこれを吹く、之をコサ吹くと云

ふものではないかと信するのである。勿論僕等の様な無鐵砲な氣狂じみた眞似は今時分出来るものでもないが、せめては極めて質素な眞に意義あるものに改めたいのである(大正一四、三、八日稿)。

ふ、コサは即ち胡笳なり、
笛聲に山氣動き登りて月も
曇るとある。

由來北國の地は遠く北海
道に到る迄一體に風が多く
風吹かざる日は稀である、
就中津輕秋田邊は北に面し
た土地であるから、北風強
烈、海邊砂塵を起し、海上
もまた濃霧が多い、稀に天
氣晴朗のときでも碧瑠璃の
空の色は見られず、白み勝
ちである。恰も陰風胡塵を
吹くとても形容すべき光景
で、この古歌の情調を味ひ
得べきものがある。

今も津輕地方の山間では
胡桃木の皮を巻いて笛を作
る、其の笛聲甚だ強調壯絶
これを吹く村童爲めに唇を
腫すものがあると云ふ、矢
張り胡笳の遺作であるかと
思はれるのである。

京 城 雜 筆



總督府 松寺法務局長筆

晝と夜

朝鮮銀行 岸

巖

◆子供の時分には、晝が好きだつたか夜が好きだつたか、今でははつきり覚えて居ない。日の暮れて行くのが悲しかったやうな記憶もあるが、らんぶの明るい下で、餅を焼いたり、昔話を聞いたりするのが、一番楽しかったやうでもある。かと思ふと、夕餉後のたそがれの濱邊で飛び廻つたのがひどく面白かつたやうにも思ひ出される。恐らく、時刻のうつり變りには無頓著

で、其の内では起る出来事の方が――よしや、それがどんなに小さな出来事でも――幼い心を明るくしたりして居たものと見える。

◆中學時代の半ば頃から、意識して夜の方を好むやうになつた。友達と話合ふのでも、本を読むのでも、夜でないと油が乗らない。無

論其頃から、紅燈だの綠酒だのと云ふ夜特有の味を知つたのではないが、何だか夜と云ふ不思議な魅力を持つたものに包まれなくては心の繋り方が少かつたやうに思はれる。たゞ矛盾したことには、其の頃から夕暮の哀愁をほんとは知るやうになつたこと、また若い時分からよく眠れなかつた私には、夜の更けて行く不安が心の何處かに巢を喰ひ出したことである。

◆二十代の末から三十代の初め頃にかけては、もう夜でなくてはならぬやうになつた。其の頃は東京に居たが、街に灯がともらぬ間は、内に居ても街に出ても、無論勤め先の机の前でも、何の味もなかつた。一日ぼんやりして半病人のやうにして居た時でも、灯ともし

頃から俄かに元氣になり出して『オイ江戸銀で一杯行かう』などと、貧弱な懷を抱きながらも、相手を物色したものである。『一體文化とは、晝と夜とを轉換することである。恐らく遠からざる未來に、人類は凡て晝眠つて夜さめることになり、晝は動植物だけの活躍する世界となるだらう』などと一角の哲理のやうに云ひ出したのも其の頃のことである。

◆ところが此頃になつて日光のありがた味がしみ／＼とわかつて來た。随つて朝が一日中一番はがらかな氣持で居られるやうになつた。晴れた光が窓に躍る時でも朝寢の枕に雨の音が通ふ時でも、――よしやそれが二日酔の寢不足な頭をかゝへて居る時であつても。

◆風呂から出て晩酌の膳に向つた時に、一寸ゆるやかな氣がせぬでもないが、朝のはからかな氣持には比ぶべくもない。一體これは、年のせいだらうか、それとも東京が夜の都で、京城が晝の都だからであらうか。

虚榮と贅澤

醫學博士 加藤 賢

【三〇】

○

動物は本能的に生を愛し死を怖れる。故に生活と云ふ言葉本來の意味は『死なずに生きる』と言ふ事で、之が第一義である。然し一般には此外に第二義的に自己の生活程度に對する理想をも併せ考へた意味を持たせて居る。殊に今日の如き物質文明で爛熟時代には此第二義が非常に力強く、ともすると第一義を没却して顧みぬ事がある、譬へば新聞紙上でよく見る『貧と自殺』は正さに其一例である。之は社會組織缺陷の罪と見てよい場合があるかも知れないが、夫れにしても突飛にも亦妙な考だ餘りに生に對して執着がな過ぎる、貧乏しながら『入らしく生きる』方法は幾等もあらうに！。

實際吾人の生活費から虚榮費を差引いたら、生命を支ふるに必要なる第一義の生活費と贅澤費となるだらう。贅澤と虚榮とは同一視する事は出来ぬ。虚榮は少しもなくても一向不便を感じない、反之多ければ多い程愈人間を愚に導く。贅澤はそうでない、唯其程度により善とも悪ともなるものである。私の贅澤といふ内には趣味も含まれて居る。第一謙の生活から見ると、趣味や贅澤は無用の様に思へるが、實際風雨を防げる丈けの家具、寒暑を涉げる丈けの衣服

饑渴を醫する丈けの原始的食物計りでは餘りに枯淡である、之を補ふ爲に潤ひ即ち贅澤が必要である

故に食物、衣服、住宅、其他精神慰安に對する贅澤は或程度迄は許容せられなければならない、茲に生活の向上がある。而して此必要缺ぐ可らざる贅澤も、若し他人を對象とした考へから生れるならば忽ち一轉して虚榮となるのである。此考で世相を諷刺めると、餘程おかしい、立派な著物を著て得意がる人、金持つたとて威張る輩、誠におかしい、得意がる、威張る皆是れ他人を對象とした尾籠な精神發露である。鳥渡下つては類の襟巻、ズーツと下級では人造金

◆ 大家の基風

吉田 莊一

朝鮮鑛業會の徳野氏が碁をやる、日本書家の加藤氏が碁をやる、何れも碁盤といふ熱し方であるが、碁盤必ずしも名手とは限つて居ない▲但しお行儀の宜いことは無類……▲出會ふと、先づ一方から『初めますかナ』『左様、一席願ひませう』宛として大家の如し▲但しいよ／＼尻を据へてやり出したとなると、十時が鳴らうと、十二時が鳴らうと、午前一時が鳴らうと、山中暦日なし▲そこで、兩氏の夫人が道でも出遇ふと、碁局

の指環一つでお手軽に虚榮心を満足させて居る手合もある、これもどうかして居る。まだ可笑しいのは金がない者がある様な顔をする其癖いつも口には金がないとは言ふて居るが、扱てと云ふ時には妙にある顔をする、考へる程おかしい、罪惡の底には女が擦て居る事が多いのと同じ様に、虚榮が座り込んで居る事も少くない。

多くの虚榮の源たる物質至上主義も、大人一代限りならばまだよいが、其親が自己の考へに合ふ様に子供を育て、行くのだから始末に了へない『マー奇麗なお、ヘネー』と子供を喜ばせる爲め、不用意に出た大人の言裡にも一生枯れない虚榮の種子を子供に植付ける魔の手は廣がつて居るのだから、マー娑婆の改良も一寸當分一服の外はあるまい！『君だつて斯う言つて子供をアヤカスだらう？』と畏友小林理學博士に言つたら『僕はそんな下手なお上手は謂はないよ』ホイ之は相手が悪かつた！。

を咄ふこと、ママシの如し『わたしほんとに碁盤を温突の焚つけにしようかと思つてよ』オットあぶない／＼▲處で、徳野氏にはモーター、將棋といふ道楽がある、好敵手は地質調査所の駒田技師、相會すると、依然として品行方正『一つ初めますかナ』『エ、お願ひませう』宛として大家の如し、併とちつとも強いことはない『お待ち申しませう』『エ、失禮ですけれど鳥渡……』お辭儀をしては待つたをやる、とう／＼何が何やら判らなくなる▲すると亦た威儀を正して『いかゞです、一つ初めから出直しませう』『いかにも』。

到底現名人と同一に見ることは出来ぬ。

名人論

事態既にさうだとすれば、阪田

の家屋、寒暑を凌げる丈の衣服

の夫人が道でも出遇ふと、蒼局

ら出直しませう』『いかにも』。

名人論

朝鮮教育普及
株式會社社長

高橋章之助

到底現名人と同一に見ることは出来ぬ。

事態既にさうだとすれば、阪田氏が、女人筋の輿望に反し、單にわがヒキ筋から推され、古來の『名人は一代一人』の不文律を打破つて、敢て名人を僭稱することは、甚だ遺憾であると思ふ。

繰返して言ふが、名人は、一代一人で澤山である。斯くして棋界の綱紀を、統制することが出来る——のみならず名人は、中外の信望おのづから成る可きもの、推さる可きもの、擁さる可きもの、決して自製自稱す可きものでない。

——阪田氏が、自重して、時を待つるの器宇なかりしは、自分阪田氏のために、深く嘆惜して已まない

見ると、ナル程、將棋は強い——

或は關根名人以上かも知れぬ。併しそれとて、香港で、花田氏（關根門下七段）に敗れ、平手で、亦同氏に敗れて居る。——それ故、實力一世の雄とも言へぬ。然らば人格は如何、棋風は如何、子弟養成は如何、棋道嗜及の功績は如何と言へば、いづれも文句がある、

◆巷説聽取帳

平田久雄

私は、將棋道の愛好者として、深く阪田氏の輕擧を悲むものである。私の卑見に依ると、

一、名人は、唯一無二的のもの——即ち一代に、一人たる可きものと信ずる。そこに、名人としての難有さ、尊さがあるのではないか。

二、名人は、實力一代を壓せなければならぬ。——けれども、唯だそれのみで足れりとせぬ。

一代の師表としての人格、棋品——亦たおのづからなる棋界の心服が必要と思ふ。つまり名人は、霸者（強者）ではない、それは王者の風格であると思ふ。そこで、阪田氏の現在を考へて

これは今年の正月のことであるが或新聞記者が時實知事を訪ふと『ヨイ處へ来た、まアあがれ』といふので、早速應接室へ通ると、知事さん吉例とあつて、寶船を書いてくれることになる▲さて紙をのべ、墨を磨り、例の雄健な筆致でやり始めたので『ウム知事さんもうまいな』と感心して居ると、七分處になつて『イヤどうも面白く行かん、先生、助け船〜』と弱音を吐く▲すると、それ迄ジーツと黙り込んで居た傍の一老漢にやりと笑つて、筆をつまみ上げると知事とけ反對の側からグイ／＼書いて行く、つまりさかさ書きである、而かも知事の缺漏を補つて立派な完成品となる▲これには、傍觀の記者先生も悉く感心し、恭しく刺を通すると、老漢は平野天

桂氏『ナール程、うまい筈ぢや』▲渡邊商議會頭の片ツ方の眼の見へるやうになつたのは、何より結構なことである▲あの人は、あゝ見へても仲々の讀書家であり、南畫の方は、漢鑑上、仲々自信を有つて居る▲殺したくないものである▲と言へば、大村商議書記長も書畫の方は滿更らでなく、然るべきものが手に入ると、早速徳野鑛業會と、タツタふたりで鑑定の上『どうぞせう』『イヤこれなら確かなもの』『拙者もさう思ふ』ナンカンとやつて居る▲三中井呉服店の主人中江さんは、論曲では京城でも良い顔であるが、繪の方でも仲々理解があり、金剛山等へ行く時、大底三戸萬家君を同行して居る▲一寸隠れたる特志家といつて宜い人▲餘り書畫／＼と言はぬ人で、而かも一番多く新畫を所藏して居る人は、辯護士の高橋章之助氏、優に三百點に達するとの事

孫氏の形見

總督府學務局 平井三男

【三三】

春は来た。天地の春は来た。然し幾多の人は、此の春光を見も敢へで、あわただしく、他界へと旅立つて行く。行く行く落花に逢ふて、恨々たる長恨の情に堪えないのは、人生の旅路である。

東亞の生み出した近世の偉才孫文氏も、遂に北京の客舎に逝いた彼の懐いた大鵬の志は、實に民國の統一であつた。五族共和の大同民國であつた。滿漢回藏蒙の五族を示す五色の旗は、小異を齟つて大同に就けとの、國民的團結の大目標である。彼も亦、大同を以て民國四億民生の福利の根源なりと確信した。故に彼が立國の大本として民衆に絶叫した三大綱領の第一は、大同であり、第二は博愛であり、第三は同徳であつた。往年筆者が東都に放浪した頃、彼は亡命の客として、東都の橋居に自適して居つた。談論を好む貧寒生であつた筆者は、屢々東亞の政局に關して、愚論を掲げて、平民的にして開放的な、此の異郷の放客を煩し惱ましたことがある。飽迄も寛容高雅の襟懷を持つた彼は、或る時請はるゝが儘に、三枚の唐紙に毫を揮つた。曰く大同。博愛同徳。之は夢寐にも心頭を離れざる畢生の信條であつたのだ。大同は筆者書齋の楣間に、爾餘の二は所藏の篋中に、依然として當年の放客の面影を偲はしめて居る。』

事去り人亡びて跡自ら留る』と賦した、劉長卿が昔の心境もそよりに追憶されるのである。

廣東在の貧家に生れ、若年して布哇出稼の家兄の許に、居候として成人し勉學した彼は、風采も思想も、支那人乃至東洋人と云はむよりも、寧ろ亞米利加人であつた。所謂東洋豪傑風の何物をも、彼に見出すことは出来なかつた。

漢字の揮毫を極端に濫つた彼は、濫面しつゝ、極めて拙い三綱領を物した。名士中の揮毫回避者としては、恐らく彼は我が大隈侯と匹敵すべき臆病者であつたらう。書に拙なる彼は、極めて巧なる英語を操つた。然も雄辯なる英語であつた。彼の辯舌は恐らく、當代東亞政客中の白眉であつた。

若冠なる一介の貧書生が、現代列國の一流政客と比肩する迄の、修養と鍛錬とを贏ち得るには、人知れぬ辛酸の涙無くてはならぬ。彼は泣き且戦ふた。而して醫學書生となり醫師となつた。人身の病を救はむと志して、却て、國家の病を治する政治家となり終つた。彼の使命は實に老國支那の若返り術を發見して、之を延壽長命の大邦たらしめむとすにあつた。彼は實に此の貴き使命に終始して履いたのである。醫師にして政治家たるもの、我に後藤子あり。彼に孫中山あり。東西の一奇縁と云

ふべき乎。巷間或は後藤子を呼んで、和製ルーズウェルトと謂ふ。後藤子ルーズウェルトに似たるかルーズウェルト後藤子に似たるか筆者は之を識らず。世の醫家須らく之を太平洋上の白鬮に問へ。即ち忽ちにして分明するであらう。唯、筆者の後藤子に囑する所は、菅に子が青少年團の導師たるに安んぜず。動もすれば頽然衰弊せむとする我帝國に、効驗確然たる若返術を案出し、應用し、以て老鼠藥に跳る、國狀今日の弊を匡濟する名醫の自分を完うせむ事である。

武斷と賄賂との亡國的政治の重荷より、民衆を救はむとして、幾度か革命の義兵を起したが、事志に違ふて、彼は數度難を歐米に避けた。彼は光緒三十三年、即ち明治四十年、滿州政府の顛覆、共和政府建設の大旗を翻して事を擧げ一敗歐洲に亡命した。彼が故山の風雲に心を傷めて、日本に歸來したとき、弊衣破帽の筆者は、欣々然として、草屨霸旅の雅客を都門に迎えた。彼亦會心の笑を漏して筆者の手を握り、慌しく身邊の行李を披いて、數卷の英書を取出した。默然として凝視して居る筆者の顔前に、之を突着けた彼は、一段と磨きをかけた流暢な英語を以て、之は予が歐洲亡命の記念物であつて、貴君への粗苞である、予がハンブル、ブレレントであると結んだ。書物虫の運命を、無上の幸福の様に羨んで居つた筆者は、謝辭を後廻しにして、即時書名を點檢すれば、一に曰く、ヘンリー・デュージ著『進歩と貧困』二に曰く、デビッドソン著『ヘンリー・デュージの先驅者』三に曰く、フリーユール・シャイム著『地代利子及勞銀』四に曰く、ホルクーム著『支

那の過去未來』五に曰く、グロンランド著『コオパラチブ、コンモ

意氣尚昂然として、東都に迎へられた萬里の行客は、北京城邊花を

に前路無からむとして居る。唯彼の偉材が遺した數卷の書は、彼の手筆を留めた儘、依然として筆者

所蔵の篋中に、依然として當年の
放客の面影を偲ばしめて居る。』

家たるもの、我に後塵子あり。彼
に孫中山あり。東西の一奇縁と云

ユールシャイム著『地代利子及勞
銀』四に曰く、ホルクーム著『支

那の過去未來』五に曰く、グロン
ランド著『コオバラチブ、コンモ
ンウエルス』第四を除くは何れも
社會主義の研究書である。就中近
代社會主義者の先達たる、デヨー
ヂの『進歩と貧困』の如きは、最
著明なる一である。グロンランド
の著書の標題英字の下には、鉛筆
を以て『大同民國』と譯語を記入
し更に朱を以て『將來民國』『未
來民國』と筆太に記入してある。

彼の肉筆である。此のコオバラチ
ブ（協同的）なコンモンウエルス
（民國）は、社會主義の上に建設
されたものである、著者は此の書
を一名『近世社會主義の解説』と
名けて居るのを見ても明かである
孫中山の理想は、社會主義の主
張を其儀、支那に實現せむとする
にあらざる迄も、彼の主張は明に
社會主義的のものであつた。社會
主義の理想の上に、支那一流の大
同民國を建設せむと理想したので
ある。彼は飽迄もアメリカ流の
共和政治を、社會主義の基礎の上
に實現せむと欲したものである。

支那とし云へば、人は青龍刀や、
黃龍旗や、辨髮や、春秋戰國時代
の山河風物を聯想する。然し、今
日の支那は決して昨日の支那では
ない。支那は青春の血に目を覺し
つゝある。青年支那の思想は、體
踏たる世界の思潮に反響し、其鳴
して、新思想の怒濤は、刻一刻支
那の民心を洗ひつゝあるのである
孫中山の如きは、正に覺醒支那、
復活支那、新生支那の大炬火であ
る。孫中山——孫逸仙の名を知る
ものも、彼か如何なる思想を抱懷
し、彼の政治觀念が、如何に涵養
せられたかを識るものは少ないで
あらう。

春風秋鷹、已に十有餘年。當年

意氣尚昂然として、東都に迎へら
れた萬里の行客は、北京城邊花を
見ずして、もう九泉幽界の彼方に
旅立つて了つた。之を迎へた弊衣
破帽の貧寒生は、徒に馬蹄を重ね
て、依然たる韓山の阿蒙、遲暮將

彼岸の日

永樂町人

一日ごと、春めいて行く。

連題や、鬪鬪の、南山の山踞を
いろどるのも、遠いことではある
まい。

うす紫にかまむ北漢山が、眼の
うちにちらつく。

彼岸といへば、蓬餅をつくつて
食へるものとばかり思つて居るの
は、なまげない。

天事や曆事に對して、もつ少し
正確な知識を有つて居ても宜らう

○
一年のなかで、日の最も長いの
は、六月二十一日——この時間實
に十四時間三十五分である。

亦た一年のなかで、日の最も短
いのは、十二月二十一日——この
時間實に九時間四十五分である。

○
何故に、日が長い（夏至）かと
いへば、太陽の地平線上に、のほ
る角度が高いためである。

○
亦た何故に、日が短い（冬至）
かといへば、同じく太陽の、地平
線上に昇る角度の低いためである

○
即ち冬至の日で、三十一度ぐら
ゐ、夏至の日は、七十八度（内外
）の天冲をするのである。

○
そこで、春の彼岸——秋の彼岸

に前路無からむとして居る。唯彼
の偉材が遺した數卷の書は、彼の
手澤を留めた儘、依然として筆者
の座右に残つて居る。そして、彼
と我、未來と現世との二者を永却
に結ぶ因縁の鎖となるであらう。

とは、何であるか。

○
それは、晝夜の時間の、平分せ
らるゝ時である。即ち夜も晝も、
正しく十二時間となる時である。

○
然らば、これは天文學上どうい
ふ境地であるかといへば、地球が
太陽に對して、全球面（南北兩半
球とも）に、平等の光りをうける
時、主星（太陽）に對して、最も
正しい姿勢をとつた時といへる。

○
それ故、實際からいへば、彼岸
前後が、ほんとうの春かも知れぬ
これから以後、どうなるかといへば
北半球は、益々太陽に向つて、そ
の全姿を、つきつける。即ち太陽
の我々の頭上に、のつかよつて來
る角度が高くなる。

○
そして夏が來る。
夏は夏至——即ち六月二十一日
に至つて極まり、これより日は、
順次短く、昇陽角度は低く——つ
まり太陽は、南半球に向つて去る
蕭條たる冬（北半球）の來る所
以である。

○
彼岸の起源は知らぬ。

併し、古への人は天事、曆事を知
つて、之を設定したに違いない。

○
然るに、今人が、餅を食ふこと
を知つて、マルで曆事、天事を知
らぬのは、どんなものだらうか。
古人に對して、恥かしくないか

失 題

東洋畫家 三 戸 萬 象

【三四】

京城雜筆社様に、毎度〱雜誌を頂きまして厚く御禮申し上げますにも拘らず昨年来の御無沙汰は實に申譯がありません、私如き文筆の才なき者に、何か寄稿せよとは御厚意にもせよ、チト御無理かとも存じますが、それで又私に取つては光榮とする處で何か一度は駄文でも寄書せねば申譯かたゝないと毎月〱氣にかゝつてなりませんでした、是が繪でも書けとでもあるならばオット来た！と迄は行かずとも、何とかお茶を濁すは容易い事なのですが、文句を吐けとなると矢張意をちぢ筆に至らずで、なかなか筆が執れません。それに今一つ申譯の理由は、私の宅は人の出入の多い事は眞に嘘の様で、眞の方です。随つてお相手もせねばならず、一方には借金も出来ま

す、責められます、拂はねばなりません、金が無い、心配になります、繪をかゝねば仕方がない、絹がありません、絹が買へた、繪が出来た、漸く金がイルデル、遊ぶ、借金……此のイルデルの早業つたら目にも止まらぬ位です、さなきだに空虚な私の頭で、こんな次第でどうして文章がかけましよう、此の下らない文句一ツ書くにも三行かいては立ち、五行かいては酷し、出る、歸つて来る、人が待つて居る、看む、寝る、と云つた工合で、考へた事も尻から尻

から忘れて何遍でも、いの一番からやらねばならなかつたのですと云ふ事が申譯にもなり、序文にもなると仕合と存じます。

處が幸か不幸か數日前の事、突然急性胃痙攣兼腸カタルを起して柄にもなくドツト病の床に臥しました、その爲め出る事も、呑む事も、遊ぶ事も出来ず、却つて借金取りには此仕末だからと、云ひ譯が立ち、結局痙攣と痙攣との五分か七分の間の貴重なる(?)時間を得る事になりましたので、それこそ本當の苦しまぎれの夜迷言をかき連らねて見たのであります。

こうして寢て居りますと、どうせ、くなく考へは出ないので、新聞を廣告迄スツカリ讀み、疲れてガツカリして眼を閉ぢると、朦朧として種々の幻影を追ひます、婦人參政權だ、思想問題だ、戀愛至上論の應用で某有夫の閨秀畫家が姦通墮落とか、それを又愛の勝利者だの、純眞の愛を獻ぐだのと美しい名を著けては不義を働く、世の中は随分面倒になつて來ました、男が女を戀するにも、女が男を戀ふにも、お久松お松おアないが、娘島田にイタツラ下げて、緋鹿の子に黒の襟取帯を纏じやらしとやらにフワリと垂らし、『二人いつしよに添ふなら、飯も焚かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや』——てな艶つぽさ

や、『例へこがれて死ぬればとて雲井に近きおん方へ、すしやの娘が惚れらりよか……親への義理に契つたとは、情けないお情に預りました』と云つた様なあどけなき美しさ(純なる)はなくなりまして、何でも新熟語許り並べて、美名の下に大それた事をやるのが流行る様になりました、その多くはデモ教育家だの、デモ藝術家、宗教家、道徳家、と云つた様に所謂智識階級なる者の方に流行する、そして一面には、本能性の肉交を醜惡そのものゝ如く嘲笑的の眼で視る、そして戀愛は至上だ、なんて夫ある女が『今迄は眞の愛に觸れて居なかつた、之れからは眞の愛に芽生へるんだ』なんて閨男をこしらへて走ります、純眞の愛だのヘチマだの云つた處で結局何れも生物が有する本能發露に終るじやありませんか、性欲學者とやらの澤田先生の弟子じやアないが、犬も猫も萬物の靈長様もそこに至つては戀りはなく、又それを満足せしめ様とするのは不思議はありません、露骨ですがポストや電柱を待合の群犬共一雌を追ふて吠へる陰の喧しい事、即ち是れ神より恵まれたる本能發露の争闘に外ならない、そして是れが最後の目的たる子孫繁殖の大願に達すべきの道程ではありませんか、靈長様だとして是れと少しの變りもありません、否彼等は或る時期を劃して其天恵に浴し、云はずして天に順應し、生殖を行ひ、兒を慈育してその任を果し、聊かの辯明する處もありません、然るに靈長様に至つては殆んどどのべつゾンダラで不仕末極まる事、道徳や法律で壓へられて漸く上へだけ制して居る事ほど左様に彼等に恥しい位です、

宗教家だつて、藝術家だつて、何んだつて凡夫である以上性慾のな

して、戀も性慾も神の創作であり肉も屁も神の創造でありますから

る様な眞紅な顔になりたいもので、ア、ア何回目かの痙攣が來ま

宗教家だつて、藝術家だつて、何んだつて凡夫である以上性慾のない者はありませんから、矢張其道程として戀もしましょう、本能實行もやりしよう、道徳や法律の裏を走つちや卑怯です、美しい羞恥心があつてパツと軋らむ氣持で表通りを通りたいものです、朝鮮畫壇紅一點の一人なる有夫の蘭秀畫家が、姦通墮落ちをして矢張り卑怯な聲を揚げて居ります、徳義上喜ぶべき事ではありませんが、元々犬猫共と共通の素質を有して居る以上、そこに飛んだ間違が出来るも仕方がないとして、矢張慚愧に堪へざる(道徳法律の存する限り)心持で行つて貰ひたい者です(直ちに有島や白蓮や(其道の)先輩にかぶれて、安つばい戀に憧れられては、それこそ社會はめっちゃ〜)になります、吾々は人中で放屁をする事は恥とし又御無禮であると習慣づけられて居ります、併し考へる迄もなく生理的作用の致す所で、それこそ出物種物ですもの、誰に不足の云ひ様もなく平氣で居て好い等ではありませんか、だが既にしない方が好いのだと習慣づけられたる以上は矢張ポット殺くなつてヤア失禮しました、とやつた方が私は純だと思ひ、眞面目だと思ひます、それを殊更に出しておいて特に磊落顔をしたり、又は放屁は生理的作用であつて敢て恥づべきものでないなどと辨明したりする事は、私はイヤだと思ひます、諸君は屁の様な問題を御笑ひでしようが、なか〜屁になりません、即ち屁を本能とし、羞恥を總とし、一寸とした御無禮を道徳及法律として、見ると同一論調を以て論ずる事が出来るぢやありませんか、そこで屁戀の結論と

して、戀も性慾も神の創作であり肉も屁も神の創造でありますから純な心持で大切に神祕の扉の中に納めておきましょう、道徳や法律に觸れしむる事は勿體ない事ですそして納めてある事を偽らない様にしませう、萬一偽はらうなどと思つて若し見つかつたら、火の出

詩學古事抄録

萬歳書閣主人

古城梅溪

陽春

楚の襄王宋玉に問て曰く先生其れ遺行あるか何ぞ士民譽めざるの甚しきや、玉對て曰く唯然れども之れあり願くは大王其罪を寛ふして其辭を巽るを得せしめよ客郢中に歌ふ者あり其始を下里巴人と曰ふ國中屬して而して和する者數千人其陽阿薳露を爲る國中屬して而して和するもの數百人其陽春白雪を爲る國中屬して而して和する者數人に過ぎざる而已是れ其曲彌高き和する者彌寡し(文選に見ゆ)

陽春一曲和皆難(岑參) 聞道仙郎歌白雪。由來此曲和人稀(同) 坐聽白雪唱。翻入棹歌中(孟浩然) 白雪和誰牽(沈東美) 雪作郢中詞(楊慎) 發調入陽春(謝榛) 郢歌高興得陽春(同) 郢雪長飛海國寒(王世懋) 郢中歌罷自銜杯(中行) 知己千秋白雪高(同) 微名削盡關何事。轉見千秋郢調高(同) 和成郢曲飛春雪(同) 忽聞麗白雪(同) 小臣操郢曲。願獻聖人看(干鱗) 白雪調空傳(同) 雪入朱絃

名産金剛飴

平田久雄

中村天風氏を中心とする京城の哲醫學會の連中は、小松侯爵を門司阜頭に送り、朝鮮の特産として、金剛飴並に三浪津の梨を献上したが、侯爵御令息には、特に金剛飴が御氣に入り、頻に賞美せられるので、侯爵並に令夫人もこれを味はせられ「ナルほど、朝鮮にも風味の宜い菓子が出るな」と、口を極めて御稱賛になつたので、使者の役目に立つた小野經濟氏「イヤこんな面目を施したことはありません」

此頃の事

朝鮮新聞社 野崎眞三

【三六】

關係は教育界の岡山閣對東北閣、
農林界の札幌閣對東大閣等がある
困つたもので東北閣などは特に戒
心せぬと巨頭の聰明をさへ掩ふ事
になる。閣關係は巨頭を諷るもの
で其濶例に西郷南洲翁を擧げ得や
うか。

ストライキ。ストライキは階級
闘争の唯一の武器らしいが、今度
の京電電車争議の如くストライキ
は遣り損で結局、犠牲者は此不景
氣に餓首されて一家路頭に迷ふ悲
境に沈溺せねばならぬやうでは駄
目だ。傳家の寶刀は抜かぬに限る
抜いても斬れない武器となるスト
ライキは遣るべからず、犠牲にな
つて餓首された従業員こそ氣の毒
なものである。効果のないストラ
イキは絶対に遣るべからずである

元大陸通信記者小林榮一郎君が
二月二十日永樂町の寓居で餓死し
た。餓死と云ふよりは凍死だと云
ふ人もあるが兎も角約一週日は絶
食し單衣の寢衣で此酷寒に癡續け
たのは事實らしい。衰へて行く生
命をジツと忍んだ最後は確に稀有
の大往生と云へる。小林君が三越
の店員時代から知つてゐる私は、
善良過ぎる小林君の死方としては
當然かも知れないが、小林君とし
ては死より外に選ぶべき途がなかつたに違いない。善良な小林君は
此不合理な善良でない世の中に生
きて居られなかつたのであらう。

◆東西南北集

平田久雄

朝鮮の春畫。妙な穿鑿だが朝鮮
の春畫は内地のそれとは大分趣が
違ふ。概して閨房の事は内地程に
洗練されてゐないので枕畫とは比
較にならぬ程に粗雑である。そし
て畫中の人物は内地の如く殿様や
姫君でなく寧ろ中産階級が多い、
そして背景は室外やら船上といふ
珍妙なのも多く所謂翠帳紅圍と云
ふ類は多い。そして房中の技巧に
至つては内地程の繊細さが無い、
勿論四十八手裏表などない、此等
はそして相當大きな紙幅に書かれ
或は繪卷となつて奴生の室とか寢
室と云つた猥らな氣分を變る爲に
飾られた相である。それもこれも
今は殆んど跡を絶つた相である。

南山の花月別荘に、おのぶさんと
いふ仲居がある▲昔しはよつぽと
別嬪だつた▲まアそれはそれとし
て、このおのぶさんに一つの美談
がある▲といふのは、去年のこと
平嬢の宮川元老が来て、別荘に遊
び、殖銀森氏のために、一幅を揮
毫した▲その時のおのぶさん『旦那
わたいにも何か……』と注文する
と、人のわるい宮川翁『サム、こ
の一幅は、お前と森さんとふたり
のために書いたんぢや、お前あつ
かつて置け』そこで、おのぶさん
これは共同の物とばかり思ひ込み
じつと占有すること約一年▲處か
ほんのこの頃になつて、或る人に
この幅を示すと『何んぢや、自慢

にならんど、こゝに森雅兄叱正と
か何とかあつて、お前のことは一
つも無い、ぼんやりするなよ』…
：茲に至つて、おのぶさん狼狽そ
の極に達し『まアほんまだつたか
それやつたらわてこの儘にして置
けまへん』…青くなつて俵を飛
ばし、早速森さんとこへ『どうも
濟みません』何と正直なおぶさん
ぢやないか▲大底の人が、銘々獨
特の健康法を有つて居るのはおも
しろい▲大日本ビールの川上さん
は、靜座瞑目、一服の苦茗を啜る
と、それが何よりの養生法らしい
▲鈴木商店の澤村さんは、盛んに
生水を用いられるとか聞いた▲何
でも漢城銀行の淺井さんは、岡田
式靜座法だつたと思ふ▲それから
不二興業の澤村さんの毎朝の太神
宮參拜▲若しそれゴルフを百歳長
壽法と禮讃する人はこれは無數。

恰度店に居られた進さん、心得

た態度で徐ろにひろげながら書に

今は殆んど跡を絶つた相である。

この幅を示すと『何んぢや、自慢

宮参拜▲若しそれゴルフを百歳長
壽法と禮讃する人はこれは無敵。

贖物を掴むの記

ちよぶや主人 堀内満輔

私の處へヨボの骨董屋が二人連れで度々やつて来る、と云ふて私が左程骨董に興味を有つて居る柄でもなければ、又買込む程の餘裕のある……この頃の景氣でないことは改めて断るまでもない。

只通りかゝりに素見かしたり素見かされたりする顔馴染と云つた處である。

ついこの頃の事、この二人がやつて来て、私の前に展げたのが無表装の古ぼけた朝鮮軸の二尺物の春歌山人の書であつた。

詩に曰く、

花明柳暗春三月。昌德宮中大極亭。
「嬌婦何知君國善。無心歌舞不堪聽」
と墨痕淋漓として、放膽な書き振り雄勁な筆力、テンから偽物と多寡を括つてかゝつた自分も、或は？と思つて更に熟視したが自分の鑑識眼では、何れとも確信はないが贖物だとけなして追拂つて仕舞ふのもどうやら惜しいやうな氣がした。

それにヨボの代る／＼語る處は斯うである、これは總督府のすぐ下に居る朝鮮人の兩班……宋秉峻のこと……のお婆さんが持つて居るのだから、今度その兩班が死んだのでお暇を買つて郷里……元平驛の放生であつたとか……に歸るので生前兩班に分けて貰つた物や、持ち物を金に代へべく自分達に賣らせるのだいふ。

伊藤公の書と宋秉峻、そのお婆さん……近頃以て成程と首肯されそうな話である。

それに、伊藤公とは云はないで日本の一番兩班などと云ふ處を見ると、持主のお婆さんも、賣りに歩くヨボもてんで伊藤公の書であることを知らぬらしい、と思はれると同時に、伊藤公を囓にも出さないだけ、贖物と承知して攫ませに來たのだとも思はれない、こりや一とつ堀出し物だなど、そぞろ食指が動いたわけである。

ヨボの云ひ値は百七十圓である眞物なれば五六百圓から千圓の代物だと云ふのに、知らずに賣りに來たのか、それとも贖物か、自分の商賣柄裂地一尺何ぼうと云ふ鑑定をしても幾らかの値打ちはある元々素見半分に指で買値を示した處『ネンガミサンは分らないの話です』とさつさと持つて出て行つたが、店先きで二人で何か騒いだと思つたら直ぐ引返して『では一應賣つて行つて見て、もしいけないと云はれた時は今夜八時頃迄に取りに來るから戻して貰ひたい』と云ふ、よろしいとその約束で買取つた。

さあ堀出し物か、掴んだか？ともじつとしては居られない、早速この方では、所藏家として又鑑識に於て定評ある軀屋の進さんの許に走つた。

恰度店に居られた進さん、心得た態度で徐ろにひろげながら書に眼を注ぐ、稍々緊張味を帯びて來た顔面、堅く結んだ唇が動き出す時、眞物か？贖物？、自分は思はず氏の顔を覗き込んだ、氏は皆迄見きらないで『矢張りこれはいけませんなあ』と斷案を下した、自分も矢張り贖物だつたかと思つたものゝ皆まで見きりもしないで、一瞥を與へただけの鑑定振りに聊か、物足りなく思つた。

『書が悪いのですか、落款が違つてますか』

と尋ねた處、どちらも共に感心せぬとの答へ、番頭さんに命じて公の印譜帳と擴大鏡を出させて、お得心が出来なかつたらよくこれで御覧下さいと、進さん擴大鏡をとつて、一々異つてる點を指摘して呉れる、成程、肉眼では殆んど見分けは付かないが、この擴大鏡で見れば全く議論の餘地はない、實に恐れ入つて仕舞つた。流石は進さんである、一瞥してその眞偽を知る、その鑑定眼に自分は敬服すると同時に、ヨボ達の掴ませ振りの巧妙さにもつくづく感心した。

◆僕の番かね

平田久雄

遞信局長浦原さんは、随分さげすんだ人だ『原稿をお願ひしますよ』といふと『もう僕の番かね、よし／＼二三日内にね……』ちつとも所謂官臭といふものがない、會つて誠に心持が宜い、▲心持が宜いといへば、法務局長の松寺さんもさうだ▲三度會つて居ると、何んぞか慕はしくなるやうなお人柄だとう／＼纏まで書いて頂いた。

京元線懷古

大陸通信社長

菊池長風

【三八】

さへ出来、日の丸の國旗を掲げた勇士の兵隊さんが、廣渺たる萩すきの大野原に見へつ隠れつ演習する時代となつた。

人は時代時代で其の醫當を變へる丈である、一千年の弓裔氏と一千年後の飛行隊の如何に其の醫當が違つて居るか、去り乍ら悠久なる宇宙の生活に比すれば、人間の變化は眞に一夢の如しだ。

○ 此の高原を越れば直ぐ『高山』の山嶽に車は下る、山峽の兩岸は危嶮亂立、南大川の源流地である、水勢急にして奔馬の如く、奇峰を迎へ亂山を送り、忽ちにして北駛し、忽ちにして南奔し、箱根山峽を過ぐるが如し、而かも奇絶怪絶たる山容は車中の客をして恍惚たらしむ、高山驛より北に下れば、そこには弓裔氏の末路を収めた墳墓がある、英雄の最後に薬水を飲ませた『三防』の清泉は、現代人も其の味を棄て能はずして醫藥に勝るる靈泉を飲まんが爲めに此處に紫門を構へ、彼處に茅茨の家を建て、人生の謎を解くこと能はぬ凡夫の群が、此の岩壁の溪谷の間に部落を作る淺ましき。

○ そこに驛あり、稱して三防驛といふ、驛より北四丁の處には百尺懸空の飛瀑あり、瀑見に来る夏期の旅客には、此の幽峽清泉は生命の延長を計るに良好の天地である、三防より北へ北へと降り行けば驛の名に釋王寺あり、その驛は松林參差の間に建てられてある。

○ 釋王寺は李朝の太祖李成桂が天下をとるの夢を結び、その謎を解ひて貰つた無學といふ坊さんに出

○ 京城より元山に至る半島の横斷は、黃海と日本海との連絡である、何程の文化も産業も貿易も持たぬ日本海との連絡交通は、只北方の若干の旅客を南に送り、南國の幾何の貨物を北方に輸出するに過ぎざる貧弱なる鐵道であつた。

○ その二十年前の頭を持つた諸國記の記者は、大正十三年九月秋もやうやう酣となる頃、此の鐵道によりて北方に向つて旅立つた。

○ 『漢江』の畔りを過ぎり『京城』の創建にロマンチックな史話で著名なる『往十里』を經て、朝鮮近世史の花であつた閔妃の墓陵である『清凉里』を過ぎ、白沙の村青松の家を眺めつゝ、火車は次第に山谷地帯に入り、やがて『議政府驛』を過ぎて、所謂鐵原高原地帯に向ふ。

○ これより山は次第に高く、地は盆地ながらも攔がり、四圍の山嶽重疊して天險を爲せり、昔高句麗の叛逆者、高麗を『鐵原』に定め、國號を泰封と稱し、百濟、高句麗の地を略して三十年間帝王を僭稱した處である、弓裔は丁度木曾義仲の様な男で、虚榮心に強く、廟者となつた氣分に囚はれ、俄に宮殿を築き、城廓を作り、豪奢を極

めた、織田信長が安土城を築き、天下の都を建設しやうとした如くに、弓裔氏の霸氣は性急で、誇大で、數年ならずして中部の朝鮮を包含した泰封國の都が、此の鐵原盆地に産れたのである、そして其の榮華が二十年ばかりで夢の如くに消へ失せ、泰封國の王權は、此の高原の奥へ奥へと追ひつめられ逃げ隠れられて、遂には今の『拂劍嶺』の高原より『高山』の幽境に落行き、恰も平家の屋島壇浦落と反對に、山の奥地に逃げ延びて今の『三防』に一代の夢を結び、一世の榮華を消失した。

○ 弓裔氏の後を追うて、一千年の後には、水利の神様と自稱せる藤井寛太郎氏や、日韓併合の産婆役で、天下一の仕合者になつた李完用侯は、弓裔氏が一千年前に残して置いた産業を復活して、金持長者にならうと云ふ現代式の醫當をやつて居る、そして其の後から小さい人間がウウウと『鐵原』『平康』の地に水利事業や開墾事業を始め来た、二十年前までは、泰封の故地は、山賊の棲家で、南北の旅客は、山賊税(山賊の害を避けるため山賊團が關所を設けて旅客より通過税を徴収して居つた)を拂つた處である、今や汽車は此の地を横ぎり、家は聚り人は移り、而かも此の高原に於て飛行場

會した處である。その記念の爲に建立した、寺が釋王寺である、李

學さんに御禮として作つて進上した釋王寺の現代は、夏は谷間の清

昨今朝野擧つて政費の減少に伴つて、消費の節約の氣風が自から鼓吹され、一般事業界は生産の増殖

會した處である。その記念の爲に建立した、寺が釋王寺である。李朝の祈願所でもつ菩提所である。そして無學を生んだ處である。

英雄の成程と怪僧の無學は、玆處に出會し、遂に二十年後にはその無學さんは往十里から瀋陽の地をトして李氏五百年の都を設計したことは小説のやうな物語りである、江原道の瀾邊を彷徨して、咸興の野原まで流寓した李氏の祖父氏が、その子に天下を握らせた無

財界の曙光

漢城銀行常務

淺井佐一郎

學さんに御禮として作つて進上した釋王寺の現代は、夏は谷間の清泉に浴せる浴客や、秋は松茸狩に集る群で賑ひ合ふ繁華の地となつた。巡禮よりも遊覽のお寺になつた、驛より二十丁ばかり山麓の松林にその寺利がある。

昨今朝野擧つて政費の減少に伴つて、消費の節約の氣風が自から鼓吹され、一般事業界は生産の増殖に努力し、内は以て實力を養成すると共に、外は歐米各國の好轉を利用せば、我が財界は漸次恢復の曙光を認め得ること必然の結果にして、決して前途を悲觀するの要なきなり。

只玆に吾人の特に注意を要することは、今後多少財界の好轉することあるとも、國民は擧つて緊張して、容易に精神の弛緩を見るが如きことなく、將來久しきに涉りて不撓不屈、勤儉力行の精神を繼續して、大成すべきことを考へねばならぬと思ふ。

◆連絡船にて

徳野眞士

我國の經濟界は久しきに涉り、不景氣を繼續し、今尙ほ人氣沈滞し、到る所行き詰りの聲を聞かざるはなき状態である。然らば此不景氣は何時まで續くか、此沈滞したる財界は如何に展開するかと云ふことは、何人も知らんと欲する處で、亦た頗る困難なる問題である。余は今日の財界は不況の絶頂にして、今後漸次好轉すべき曙光を認め得べしと信するものなり。

凡そ經濟界が不景氣より好景氣に展開するに當りては、之に先ちて必ず先づ金融緩漫、物價低落の時代を經過することは、近世文明諸國の歴史に照し蔽ふべからざるの事實なり。

歐洲戦争後の好景氣に乗じ、我國經濟界は幾多弊弊を發し、爲めに金融業者は巨額の固定貸を生じ各種企業家は事業に多大の損失を招いたのである、然るに是等の金融業者或は企業家が、減資又は減配等の方法により其固定貸又は損失を整理銷却をなさざるときは、永久に營業の擴張發展をなす能はざるが故に、此際一時の苦痛を忍んで、配當の減少、事業の整理を完了せば、財界の景氣挽回は決して難からざるなり。

今や我國貿易の逆勢は、未だ全く回復に至らず、物價今尙ほ低落せざるも、歐洲の財界は漸次好轉の氣運に向ひ居る際、我國は金融緩和、物價低落の傾向を生じ、亦

禍福はあざなえる繩と申しますのが全くです、昨喜ひに充ちたる妻を乗せて歸りたる船に、今私は憂ひを抱きて乗つて居ります。私は今大阪にて明後十四日に行はる、安田靖子夫人の告別式に參列する途中です。

下關棧橋に著いた景福丸は、ロツプが切れて又硯の海を一周して著け直しをやつて居ます。岩柳島も、彦島も、さては丸山、筆立山、三角山、火の山も、昔のまゝに私を迎へて呉れます。山容水態すべてありしまゝなる中に、わが安田夫人はもう此の世にはないのです。私は昨日列車の中で告別の辭を草したいと思ひましたが、萬感交々胸に迫りて句を成さず、空しく釜山に著いて、寝られぬ夜を船に明かしたのです。(三月十二日朝)

佛蘭西料理

京城朝鮮ホテル 伊 藤 龍

の料理が低下した理由である。

○ フランスで、黄金時代と稱するルイ拾四世の頃、藝術化の運動は殊に著しかった。其頃に料理の藝術化といふが如き論議が起つて、宮中料理人は、料理の藝術化の研究に努力した。

フランス料理として、世界的名譽を博するに至つたのは、實にこの料理の藝術化と云ふ目標の下に懸命になつた拾七世紀の賜物であらう。

○ 而して、フランス人の藝術的天稟——その藝術探求の熱意がその達成に與つて力あつたことは特にいふ迄もない。

○ 西班牙、伊太利、あらゆるラテン系の生んだ料理に研究の腐心を齎らし、自分等の先天的の力を利用し、勿論この先天的の力の働きを助くるに、佛國々士の産する許多の材料があつた。要するに其材料は彼等の趣向に相應し、藝術的本能の満足の對象として充分價值があつた。それで、フランス人は其材料を取り入れ、異存なく提供したのである。例へばフランス特有の芳味料の如きもそうである。斯くの如くにして、フランス料理として、換言すれば藝術化した料理として、自分等の創造した料理の如くに作り上げた。

それが西班牙とか、伊太利とか

○ フランス料理の世界各國の料理に比例して、上位を占むると云ふ譯柄は、この料理の藝術化と云ふ強い閃きを含んで居るからで、世界時潮の藝術至上を謳歌する現在に於ては、猶更にフランス料理の

◆十人十色帳

平 田 久 雄

京城各銀行の幹部連約三千名は、この間大學して慶州見物に出向いた▲歸りに、釜山に向つたものもあるし、東萊に一浴と洒落れた方もあるらしい▲數々の珍談もあらう、何つれ誰かの筆で、次號に御紹介願ひたいと思ふ▲小野經濟氏が、俳句をやつて居る、その柄ぢやないと笑ふ可らず、この間龍山の鈴木定寛さんが、小倉の大隊長に轉じた時『彼岸來て高麗の衣を著更へけり』へい、どんなもんぢや▲東拓の二宮支店長、見るから重厚なお人柄なので、頗る評判が宜い、最近二階にあつた支店長室を、階下におろした、それは氏の平民振を、直地に示すものであるが、口善悪ない連中、これを呼んで『天孫降臨』……は、よかつた▲京畿道馬野さんの『うき草の半生』が、とう／＼出た、馬野さん

○ 歡迎するべき理である。

【 50 】

一方日本料理の比較的發達しないこととは、日本人の性格、即ち淡泊な性情と習慣の要求する固有の挨拶が然らしむるのであらう。自分はそう思ふ。

やはり、料理の藝術化と云ふ運動に著手したならば、日本料理の發達する近道であり、現文化の眞的要求に應ずるのもこの藝術化であらうし、而してフランス料理に遜色のない日本料理として對立すべきが、日本料理の使命であらう。藝術化した日本料理の實現も、遠からず來るべきであらうと想ふ (一九二四、八、一七)

には多分の詩人的真賦がある、讀んで泣かされたものは、私人のみでなからう▲この『うき草の半生』には、到る處俳句がある、そのやうに馬野さんは盛に句を作る▲亦た酒席で、興に乗じると、得意の『自由書ダンス』が出る、正に天下一品の好評▲警務局の關水さん、誰は随分長くやつてるが別に油畫といふ趣味がある、何んでも西洋に遊んで戻つてからは、畫境更に一進、優に玄人を驚かすに足るといはれる▲轉任で惜まれ居る坪内第一高女校長、酔へば武勇傳を演出する一寸とした癖があつた▲でも、時實知事には一目も二目も置いて居た▲いづつかも鐵瓶のたぎつた湯を、知事にぶつかけると、はしやいでゐたが、知事は平氣の平左泰然として何とかいふお經を讀んで南無阿彌陀佛／＼と、行ひ濟して居るので、とう／＼鐵瓶のやり場がなくなつたと、坪内さんらしい逸事だ。

らしい、それでもチヨイ／＼やつてゐるよ。

の如くに作り上げた。
それが西班牙とか、伊太利とか

で「天孫降臨」……は、よかつた
▲京畿道馬野さんの「うき草の半
生」が、とうとう出た、馬野さん

くくと、行ひ済して居るので、と
う／＼鐵瓶のやり塚がなくなつた
とは、坪内さんらしい逸事だ。

制札靈驗記

朝鮮警察新聞誌

田村直一

曲り角の立小便と酔つ拂ひの立小便とは、何處でもつきものやうになつてゐる。或る警察官が酔つ拂ひの立小便を捕へて、君ッこんな所に立小便をしては困るではないかッと注意すると、酔つ拂ひの曰くが振つてゐる。

『ペランめえ、どうしてこゝんところへ曲りッ角をつけやがつたんでい』と曲り角での立小便は天下御免の積りと云つた風である。然し善意に解釋すれば、幾等か人目を避けるといふ點に酔つ拂ひとしては案外眞面目な處がある。

流石の警察官も此の奇問には一寸面喰つたとみ之は東京であつた話の又聞きであるが、吾輩が京城の市中を歩いてゐる時、如何にも京城の通信機關にしろ交通機關にしろ其總べての施設に於て成程朝鮮の首府であると背かれるだけ取り分け不自由を感じる事もないが例の小便問題の時は別だ。

無論市街美の上からも亦一方附の經費の上からいつても、そう無暗に公衆便所なぞを拵へる譯にも行くまいが、今日のところ京城市内の公衆便所は誠に顕微鏡で探がす位しかない。

そこで朝鮮の都も一度裏通りへ足を踏み入れたなれば誰でも氣のつく事であらう、一寸人通りの稀な曲り角や擬際になると何時でも泡の立つやつが流れてゐるのみならずピリッと左り巻きに捻ぢられた黄金の山が隨所にある。

之を未然に防ぐとすれば要所要所に晝夜兼行の立番をして居なければ迎も駄目である。それでそんな暇のない附近の人達が凡ゆる脳味噌を絞つて之れが防禦策を講じて居るところであるが、先づ制札を以て防いで居る中に頗る珍妙なのや振つた文句がある。

一、先づ普通であるのが「此處大小便すべからず」と云ふ文句だが之には一向反應がないらしいのみならず、あべこべに、どこか好い場所はと探して居る連中には誠に格好の場所であると云ふ具合だ

二、少々酷いものになると「犬の外小便すべからず」とか「犬なれば仕方なし人間はするな」などと高飛車に出たのがある、之もあまり效能がない、臨時に犬の眞似でもしようかいなどムチャクチャつて居る。

三、滑稽なものになると「此處へ大小便をすると、お道具が腫れます」と云ふのがある、之は七分通り效を奏して居る、どうも腫れるとなれば頗る物騒だ、井戸か、墓地か、或は神佛を祭つた跡ではないかといふ氣も起つて来る、ナイニ腫れるか腫れないか一つ試して見ると云ふ程意地を持つ人もない

らしい、それでもチヨイ／＼やつてあることもある。

四、人を喰つたのになると、なんにも文句が書いてない、其の代りに適宜の板切に朱で鳥居を書いて中に「正一位稻荷大明神」とやつてある、随分非道い話だ。

が、之だけは絶對的に奇效を奏して居るのは嬉しい、流石に神國の民であるわいと肯かれるが、こんな不淨の場所へ「神様」を擔ぎ出して脅かさんでも何とか仕様のないものか知らん、とも思はれるが、然し、其の附近の石垣や煉瓦塀の根なども、カラ／＼に乾いて只白く固まつた鹽分らしいものが薄く滲み出で居る中に時折、プーンと微かに芳香が漂ふて居るのも戦いの跡が偲ばれるやうで一吋皮肉だ。

無料宿泊所

吉田莊一

瀨戸病院長は、隣界でも随分顔の廣い方であるが、俳人、歌人、新聞記者といつた方面にも、仲々知己が多い。▲この間も、或る男が入京して居るから、君は何所へ泊つて居るんだと訊くと「瀨戸病院へさ、僕はいつも來ると、あすこへ入院するんだ」……入院は面白い▲つまり先生は、無料宿泊所も兼營して居る譯だ、忙しい等々▲鎮南浦商議會頭の川添さん、碁の方は正真正正のザル組だ▲處で、この間平南和事の米田氏と一夕會戦すると、不思議や連戦連勝……ソコで川添氏曰く「どうも僕の碁は、旅に出ると強くなる」▲因に曰く南浦は昔から碁客の不思議に揃つて居る處である。

素人映畫觀

京城日報社

寺 田 壽 夫

水谷八重子も可憐で好きな方です
新しい方では筑波雪子などが、
顔だけが整つて居るいゝ女優とし
て將來がありさうに思へます。し
かし之も我々素人の考へで、豫言
ではありません。

や岩田などのやうに厭味がなく
結構です。
女優では、近來梅村琴子が巧く
なつて來ました。この女優も厭味
がなく、いゝと思ひます。五月信
子の深刻な表情、柳さく子の優婉
な表情等は出來なくとも、何處か
に大成しきうなところが見えます

京城といふところは、民衆娯樂
の機關として、活動寫眞より外に
格別見るやうなものもありません
その故か活動といへば、何時も人
氣の中心となつて居るやうです。
私などは、仕事の關係で時々見物
に參りますが、近來は日本ものも
なか／＼いゝ作があります。殊に
俳優の演技の撮影上の技巧には驚
くべき進境が認められます。

諸口がどうの、妻三郎がどうの
五月が帝キネに行つたの、梅村が
日活に入つたのと、近來では、猫
も杓子も映畫俳優の消息ぐらゐは
心得て居ります。ところが映畫會
社が殖えるのと、事業が擴張され
て行くので、俳優なども雨後の筍
で、到底名前など覚え切れないほ
どです、それでも繪葉書屋の店頭
に、新しい女優のエハガキでも
出て居れば自分のアルバムに加へ
るのも私としては仕事の一つです
好きな俳優といつても、役割や
ら、その時の出來榮えやらで一概
に言へませんが、私は東亞キネマ
の阪東妻三郎は好きな一人です。
彼れは小鼻のない平べつたい日本
人式の顔でなく、キリツとした深
刻な顔立ちです。平面的でなく、
立體的な影の多い顔が、自然と映
畫に適するやうに出來て居ます。
彼れは時代劇で敏活な立廻りや深
刻な性格を現はすことは尤も誂へ
向きです。それに彼の藝には諸口

◆愚人愚感錄

吉 田 莊 一

丸山幹堂氏が來て、京日にも堂々
たる社説が出るやうになつた▲『
對山鏡』なども、なか／＼氣が利
いて居て、讀んで氣持が宜い▲社
説といへば、日目は、以前からそ
れを載せて居た▲但し時々でも宜
い、有馬氏のそれを拜見したいも
のだ▲キビ／＼して居るのは、大母
の『北漢山』だ、僕はいつも愛讀
して居る▲愛讀といへば、日々に
折々出る一客星君の漫筆も、堂々
として居て、大に宜い▲一客星と
は、同社客員飯田三郎氏のことだ
さうな▲朝鮮新聞も『唯一の民間
紙』と自稱する以上、タマに社論
ぐらゐあつても宜からう▲議論な
き『唯一の民間紙』そんなものは
ある筈のものぢやない▲權藤氏、
石森氏共に多忙なれば、五百圓出
して、東京から輸入するんだネ▲
尤も朝鮮の社會部は、何といつて

朝鮮にもボツ／＼映畫製作所が
生れかゝて居るやうですが、素晴
らしい朝鮮美人の女優でも出て來
ないかと期待して居ますが、何し
る經濟關係で朝鮮の映畫界が、ど
れ位伸びるかを疑問です。いづれ
は内地の大會社が手を染めて來る
ことと思ひますが、朝鮮を題材に
した映畫がだん／＼頭を擡げて來
ることは結構なことです。

も振つてる、之は鮮やかだとほめ
て置く▲此頃東京の細井肇氏から
『朝鮮問題の歸趣』といふ一書を
贈られたが、これ位熱氣に富み、
讀んで感激させられた書物はない
▲一語／＼親しく著者と膝を交へ
て、その熱辯を聴くやうだ▲弘く
江湖の有志に讀まれんことを希望
する▲東京在住の釋尾氏も、四月
には朝鮮に歸つて來るといふ、多
分例の『併合十五年史』が脱稿し
たのであらう▲あの病弱なからだ
で、何千頁の大冊を執筆したのは
大に同情する▲伊藤京城覆審法院
判事は、曩に『法醫秘語』を大阪
屋から出版したが、それは上ほど
世間に歡迎され、書肆も大に儲か
つたと見へ、この頃伊藤さんに『
續法醫秘語』を書けと、しきつと
責めつけて居るらしい▲それから
大陸通信社長の菊池さんが、近く
『朝鮮諸國記』を出す、同氏の博
宏の識と雄勁の文と、これは觀物
だらうと思ふ。

お君のこと

満鐵庶務課 鉦鹿 曉 太郎

○ 曾て京城の某紙が指の標な大きな活字で『怪美人の行衛』と題して数日報導した當のヒロインこそお君である。

南大門驛の二二等待合に隣つて喫茶店がほの暗くへちやげた様に陣取つた時、ほんの腰かけ的にそのウエートレスとしてヒラ／＼パター／＼やつて居つた。彼女が以前京都ホテルで覺へたブロークンイングリツシユで紅毛碧眼の御客にブツかつて愛嬌の大安賣りをやらかした客のまばらの折又は小棚の蔭などで彼女は其胸のあたりに隆起せる肉塊を露はし、節くれだつたむくつけきさま／＼男の掌を引きよせて撫でさせて妙な笑ひ方をしたものだ。

○ 此手を喰つた御客様は二度ならず二度ならず此のせつこましい喫茶店に姿をあらはし、ぬるいコーヒーを啜りながら温かき彼女の胸のあたりに觸らばやとどろける様な膺を寄せて居つたもんだ。妙からぬチップを手にしたお君は、無論あちら向いて紅い舌をペロリ

○ 身長實に五尺三四寸、豊満なる肉、爛熟せる戀心——之を包むに柔かきお召の衣裳、それは當時流行のケバ／＼しい装はひであつた燃え立ッ許りの緋の蹴出しを思ひ切つて奉仕的にひらめかし電車に

乗つたお君は鋭き視線を車中に投げ、特に選んで中年紳士の側に其のデツかいお尻を落ちつける。雖て車掌が賃錢を取りに来る、すると一寸帯の間をさぐり二度目には少しく狼狽して懐中から袂から捜し廻はす、其形容頗る誇大『あら羨、紙入を忘れてよ』車内の視線悉く彼女に集まる時、やをら口を開く者は隣りの紳士である『私が出してあげませう』と来る『オヤほんとにすみませんわ』てなことを云つて秋波を一ツ。

○ 此場合若く美しき婦人の困厄を見ながら三錢や五錢の同情を惜しむは紳士の恥づ可きことである。電車を降りた彼女は白い唾をペツと吐いて『ヘン甘あもんだ』其の流暢に依ると錢など出して電車に乗つたことはないよと云んだ。

○ 口を横に開いて發音し燕の様な節の喋舌り方を習つたKは此頃其のお喋舌で飯を食つて居つた。Kは色の淺黒い小型の男で敢て顔がのつべりして居つた譯ではないが兎角女に可愛がられたものだ、どの程度で意氣投合したのか這間の消息を詳にせんが、問題の本人お君から同棲を申込んだらしい、Kはオーライとか何とか云つて吉野町の上の方新建の長屋の一角に新しいシチリンや摺鉢を買ひ込んで共同生活を始めたものだ、Kが出

勤の留守は日當りの好い縁側の障子を開けて寝ながらに講談雜誌を讀んで居つたかどうがよく知らん五十圓足らずの収入で足る譯は無かつたが彼の女はバツ／＼と拂つて知らん顔をして居つた。

○ Kの紹介電報の後を追ふて釜山ホテルに乗込んで上等の室に構へた貴婦人こそ之れなんお君だつた朝鮮の或るやんごとなき人——それは彼の女が特別の恩顧を辱ふした人である——連絡船に出迎へて特別な敬意を表せん爲であつた然るに受持のボーイが何か無禮の言動があつたと云ふので支配人室に怒鳴り込だ貴婦人はあられもない火鉢の側に突つ立上り、徐ろにしゃがみ込んで尻を捲くり左右の袖を絞り上げて白くふくよかな其の腕を突き出しタンカを切り初めた『馬鹿におしでないよボーイの癖に、室料を値切つたりデツプをケチ／＼する様な奥様とは奥様が違ふんだよ……ホテルは年々から年中客扱ひが仕事ぢやないかい……何て大きな聲をするなつて之れは妾の地聲だよ』弱つたのは支配人だ、低頭平身ヒラあやまりにあやまつて勘辨を下し置かれた。

○ 大正四五年と云へば物價の廉い時だ、朝鮮銀行の指數が百に戻つた時だから新しい十圓紙幣で千圓そのやんごとなき人の側近から彼女の手に渡されて居つたのである京城に歸つた彼女とKとの共同生活を打切つて何れにか去つて終つた。お君は遂にお君さんでなかつた。十年の月日が流れた。當時好奇の心を動かした讀者もあつたことと思ふ、知りたいのは彼の女の其の後である。

春 一 日

永 樂 町 人

【 四四 】

今日は、彼岸の中日である。

午前十時、守屋三葉氏が、東京
に行くといふので、京城驛頭に送
る。

天気晴朗、春既に地上に訪づれ
たるを知る。

洋杖を曳きつゝ、竹添町方面を
散歩する。

南山を願望すると、山腹一帯、
うすき霞につままれたるやうに見
ゆ。

ふと、芭蕉の句が、胸底にうか
んで来る。

奈良に出る道のほど

春なれや名もなき山のうす霞
春は近い——櫻花咲く頃になれ
ば、支那馬車を騙つて、碧蹄館の
古戰場だけは、是非とも訪はうと
思ふ。

芭蕉の句が、いろ／＼思ひ出さ
れる。

草 舍

花の雲鐘は上野か淺草か
これなどは、凡庸な句である。
餘りに、耳に熟して居る。
併し、しみ／＼味はつて見ると
やはり名句である。

春雲、花埃の下に、雑然とひろ
がつて居る大郡——大江戸が、眼
に見るやうだ。

その都會の騒音、擾聲さへ、遠

く耳に響いて来るやうに思ふ。

さう言へば、芭蕉ほど、自然の
心を——その一つ／＼の脈搏を、
よく心解したものはないと思ふ。

よし野にて

しばらくは花の上なる月夜かな
これなどは、寂然たる境地で、
月と花とが、空しく相照して居る
光景が、無限の寂味を有つて、人
の心に浸透して来る。

歳わかき頃は、芭蕉の句に、多
少の厭味——平俗の臭味を感じた
命ふたつ中に活きたる櫻哉
一例である。

併し、つい近頃其『はしがき』
『水口にて、二十年を経て、古
友に逢ふ』
を讀んで、やはり眞實の句だと
感服したのである。

この頃、新聞を見ると、アメリ
カの一科學者が、日光及び空気が
ら、或種の新營養素を抽出するこ
とに成功し、將來人類は、口から
パン及び米を、攝取しないでも宜
い——さう言ふ時代が必然に來る
と揚言して居る。
私は、大賛成だ。

人間の文化史は、人間は、自然
のお世話にならぬ、自然に依存し
ない、寄食しない、その庇護の下

に立たない——人間は自ら獨存す
る。彼れ自らの文化をつくるとい
ふ目的の下に、進んで來た。
それ故、肥料を培つては、小麥
稻を生畜させ、そして、それから
食物を仰ぐなどは、人間文明の一
つの屈辱だ。
彼等の營養料は、どうしても彼
等の頭——智慧から生れなければ
ならぬ。

況んや小麥、稻といふも、それ
は、皆植物であり、その植物は、
日光及大氣の攝取で、生きるもの
である。

人は、腐植土といひ、窒素とい
ひ、某々肥料といふも、植物が生
長、伸茂する主要料は、悉く太陽
及び大氣に待つのである。

而して、人間は、何故に米及パ
ンを食ふかといへば、それは、稻
及び小麥の中に、吸収された太陽
及び大氣の『精素』があるからで
ある。

極言すれば、われ／＼は、光素
及氣素に依つて、生存するものだ
即ちこの間接攝取を、直接攝取
に、ふり代へる方法が、ない筈は
ないと思ふ。

日本の農民四千萬、何のために
汗血を流しつゝあるか。

日本の耕地六百十五萬町歩、何
のために空費されつゝあるか。
唯だ『米を作るため』で——そ
の米は、全人口を養つて、尙足ら
ぬと言ふでないか。

何たる人力の徒消——土地の濫
費——。

こんなことを、黙想しつゝ、私
は、ぶらりと草舎に歸る。
几上に、矢野恒太氏の『途上偶

感』がある。

仰臥して、それを讀む。或る一

はない。日本外史など講義して

居ると、百性衆が、門内に群集

の方でも、お心づきの點、御指圖

願ひ上げます。

その都會の騒音、擾亂さへ、遠

の世話にならぬ、自然に依存し

は、ぶらりと草舎に歸る。

几上に、矢野恒太氏の『途上偶

感』がある。

仰臥して、それを讀む。或る一節は、おどろき正座して、それを默讀する。

矢野氏は、第二の福翁のやうな氣がする。

其博宏の目録、深遠の學殖——そして暢達、平明、親切な言説——一代の大人である。長者だ。

○ 矢野氏は、十五六歳まで、わが亡父の漢學塾に寄寓した。即ち私の宅で、そだつた人である。

彼れは、俊爽英邁、少にして大人を呑むの機度があつたらしい。祖母會て、私の幼年時に、あとにも、さきにも、あんな兒

はない。日本外史など講義して居ると、百性衆が、門内に群集し、鳴りをひそめて聴き入つた。どれだけの辨者になるか、智者になるか、未恐ろしくさへ思はれた。

○ 今、矢野氏の近著を讀むと、彼れは智者でもなく、辯者でもなく、渾然たる一代の賢哲である。

彼れがいかに、玉成、大成に、慘澹たる工夫を拂ふたかと思はれる。

○ 私は、卷を捲んで、瞑目した。そして、はてしもなく、さまざまの感懐のあとを、右に左に、追ひつめたのである。

編輯後記

吉田 莊一

◎好時節となりました。さすがの寒がり屋の記者も、三月廿日には急にストーブ撤廢論者となり春晴に乗じて、散歩など試みて居ます◎どの雑誌の編輯者もいふやうに月刊物をやつて居ると、一日だつて氣の休まる時はありません。前の號を出すと、すぐ次の號です。二三日でも油斷しやうものなら、忽ち發行期に至つて、遅刊といふ臆面に出逢ひます。

◎大匠心がけて、原稿の御願にあがつて居ますが、たとひ御伺ひ漏れであらうとも、どうか御思ひつきのことは、執筆せられて小社へ御惠願ひます。文士佐々木茂察氏の最近の隨筆に、

書きたいことがない、といふのは嘘だ。書きたいことは時々確かにある。しかし、書きたいことのあるときに直ぐ書くといふ

良い習慣を失くしたものだから結局『締切日』の來たときに『原稿』がないといふ結果に終るかういふ悪い結果に直面しないやうに、平素いい習慣をつけておきたいと思ひながら、毎月、毎月を過してゐる。自分がなにも書かないのは、書くことがないからだと思つては欲しくない。一に良い習慣を失くしたからである。いい習慣を失くしたのは……。

尤もだと存じます。どうか皆様も、考へる——スグ筆をとる。さうして頂きたいと存じます。

◎伊藤(憲郎)さん、中村(健太郎)さんからは、よく氣をつけて稿を送つて頂きます。ほんとにお禮の申やうもございませぬ。

◎櫻花は、この月の末に咲き、われくは、この一月を、花と寝ね花と明すわけであります。感懐無量でなくてはなりません。どうか五月號に、ぞんぶんお書き下さい◎どうも經濟論が振ひませぬ、何とかしやうとは存じますが、皆縁

の方でも、お心づきの點、御指圖願ひ上げます。

寄稿家へ

——御願ひの事——

前號にも、一寸書きましたやうに、五月號の原稿は、四月の五日から、工場に送り、遅くも二日には最後の稿を手交するやうにして居ます。それで甚だ勝手がましうございますが、玉稿は、一日でも一時間でもお早くどうか御惠投下さいますやうに重ねて御願まで。

雜筆編輯局

細工の御用は 徳力へ

本町 電本三九三九

地金/御用ハ 京城明治町 徳力本店出張所 電本二〇八八

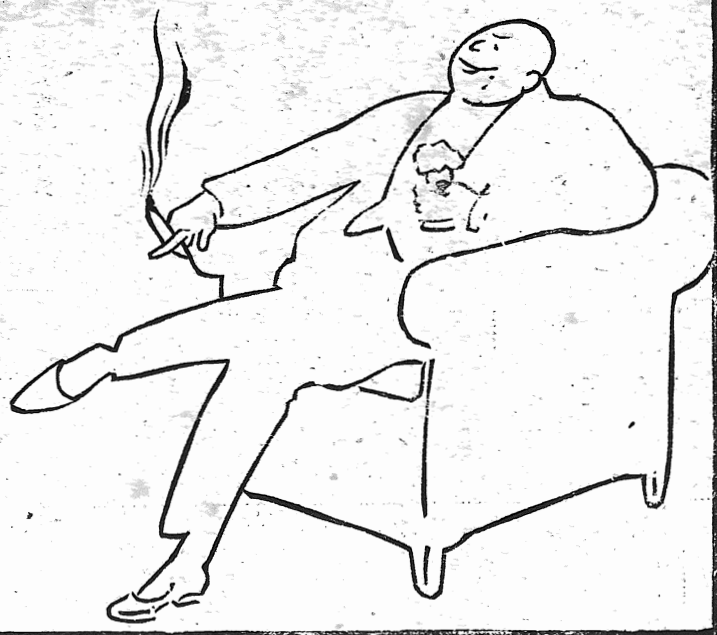
金白銀金

大正十四年 三月三十日印刷
大正十四年 四月 一日發行

一部定價金四十五錢

京城府和泉町一六四
發行兼 松本 武正
編輯人 前原 登久雄
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

サッポロビール
リボンシトロン



向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會縮産業部の製品
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九九
三〇九〇
番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の節は店內クツ部御呼出被下度候

熊平商店 株式會社

誌 雜 藉 書 外 內
類 具 文 具 動 運

大 阪 屋 號 書 店

目 丁 一 町 本 城 京

番 { 四 八 六 } 局 本 話 電
六 八 〇 二

番 三 七 五 二 城 京 替 振

浴用



朝鮮總督府
專賣製

一元販手一

堂生貴

目丁二町本城京
番八六七城京藝振・番八三一局本話電



眞にこれ我が蓄音器界に新紀元を劃する優秀器

蓄音器月賦販賣開始

金三十五圓御拂込と

同時に現品差上ます

第二回ヨリ金六圓宛向五ヶ月

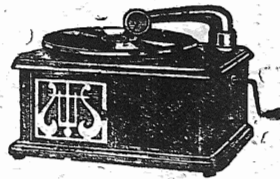
一、高音にして又如何に低
麗微妙な音色でも原音そのま
まに聞かれます

一、瑞西製一時二挺モーター入

一、演奏力兩面盤五面

一、發音管最新グーズネツク巻上

一、品質永久絶對保證



オートホーン 號

乙號金十八圓

御拂込と同時に現品差上ます

第二回ヨリ金四圓宛向四ヶ月

◎音聲強大、使用に便利で輕
るくて嵩ばらず室内用旅行用
最適品

京城本町壹丁目
外國貿易元
直輸入元
セヤマ樂器店
電話本局一四七九番
振替京城一〇七五六番



運動と庭球

ボールの選擇は

A 印軟球

權威ある試合の

指定には角一ボール

◆ 全鮮各地運動具店文具店に ◆
◆ 御購求あらんことを奉願候 ◆

大角一ゴム合資會社

京城出張所



事務所

朝鮮銀行前

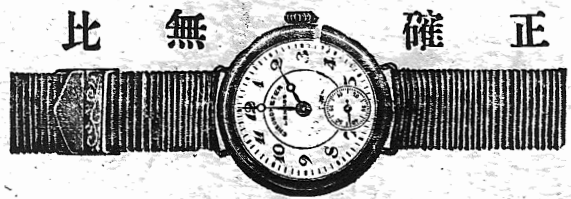


早川金次郎 時計店

工場

黄金町四、交又号
電本二四七六番

新學期と腕巻時計



正 確 無 比

腕時計は文明國一般の流行

腕時計はダウンして流行するかと云ふと
實用上腕時計よりも一層便利であるか
らです腕時計は一度お試しになると新
味と便利とが忘れられないで必ず最つ
と早くから使用すれば宜かつたと思
ひになります腕時計は最早流行を超越
した缺くべからざる實用品となつて
ゐます

標準時計

正しい時間觀念を中心として活動しつゝ
ある學生交通従業員諸氏の爲に特に
瑞西へ注文せる贅飾を一切省き機械の
堅牢に重きを置く實用時計が新着いた
しました

- ニツケル腕時計10型ア 金九圓九拾錢
- ニツケル腕時計十五型ア 金拾圓五拾錢
- ニツケル腕時計同型ア 金拾圓
- ニツケル腕時計9型ア 金拾圓
- ニツケル腕時計9型ア 金拾圓
- ニツケル腕時計9型ア 金拾圓

其の他各種豊富に揃つてゐます 御散策旁々御来店 御高覧の程 御願ひ致します

東京本町一丁目四局本話電
木村時計店
九一三城京替振 六六一三一七四局本話電

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣
局製造の本品は
理想的經濟的の
調味料で文化的
活に缺ぐべから
ざるものであり
ます
徳用大瓶小型振
出瓶等數種の美
しい瓶入で價格
低廉です是非御
使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

春向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷

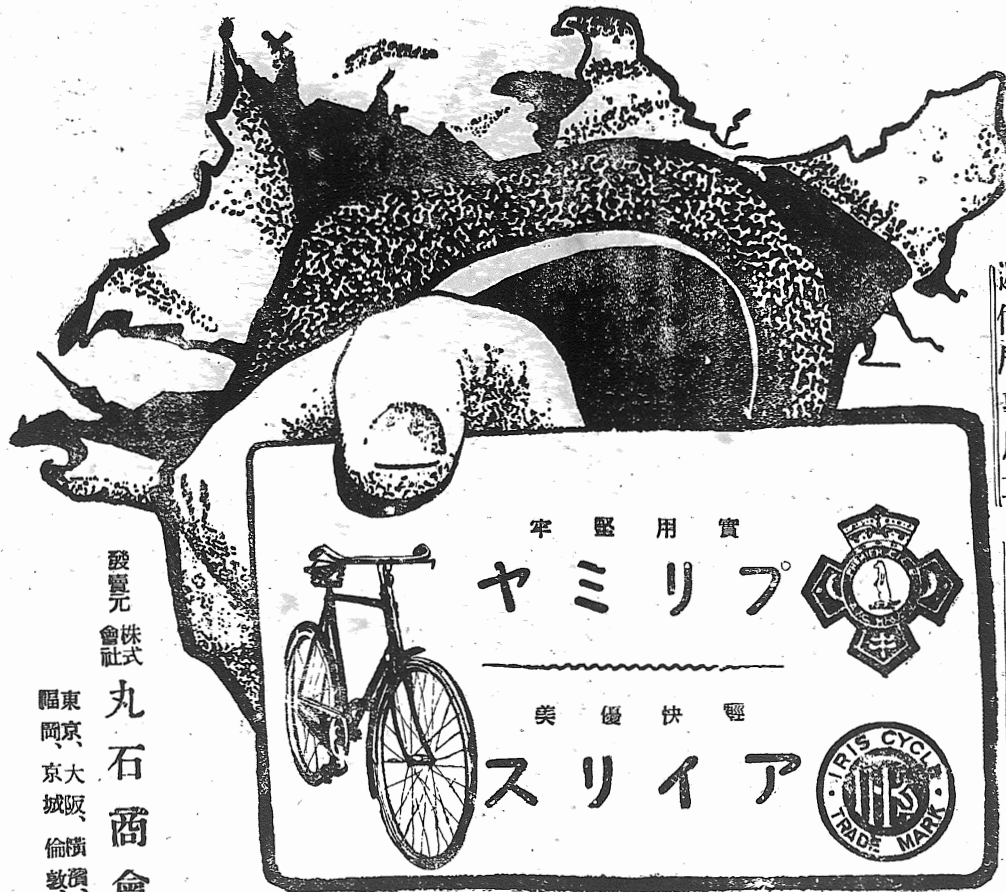
仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品類る豊富

▲御注文に應じ特製仕候
京城 鍾路 一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城二八四三番



遞信局専用車

各地有名自転車店ニテ御購セラレゾ

実用堅牢

ヤミリップ

輕快優美

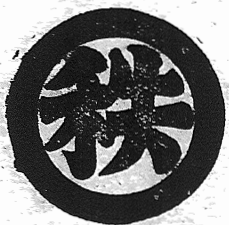
スリイア

發賣元 株式會社 丸石商會

東京、大阪、横濱、
福岡、京都、倫敦

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
ちんぼや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	柏	お	羊	煎	饅	山
し	ん	の	に	ん	子	こ	羹	餅	頭	飴
	ふ	わた			菓	し				

朝の實菓子

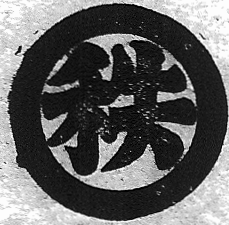
{番七二}話電
{番五七四}局本

店商屋龜

町本城京
目丁二

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
ちんぼや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	お	羊	煎	饅	山	飴
し	ん	の	に	ん	こ	羹	餅	頭		
	ふ	あ			し					
		た			る					
					こ					

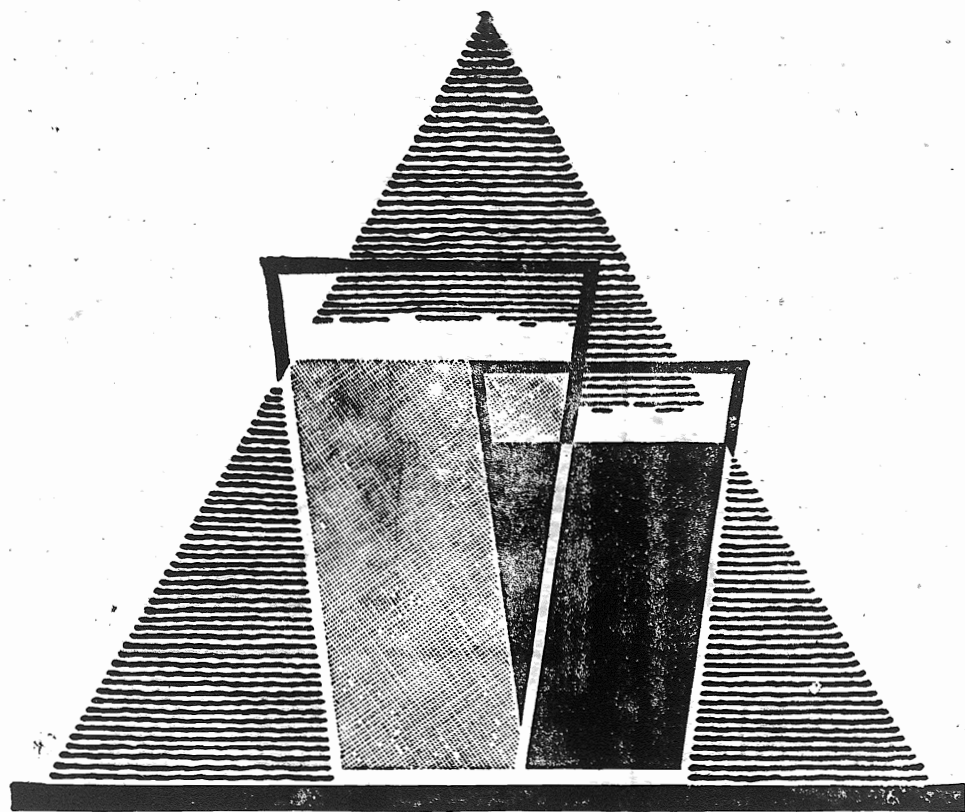
金剛柏子菓 (朝の實菓子式)

電話局本
{番七二} 話電
{番五七四} 局本

店商屋龜

町本城京
目丁二

キリンビール



株式會社 明治屋 發賣

キリンビール

京城雜誌 (第七十四號)

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年四月一日發行(每月一回)日發行